だをを云ぎんなをが有もんか。何でも喰た物の代に貳朱斗りやろう男イエ〳〵さよ
じやありませんわいな。ハテ高いとお思召なら。わがつた物を殘ずお戻し下さりませ
〳〵ト此一言よこまり彌次郎やつきとなつてせり合た所〳〵北八エヽめんどうな彌次さん
〳〵が理屈づめにあつて大へ込となり。まじくじすれば
はじまらねへせ彌次いま〳〵まひ云分があれと勘定づくて恰好が悪い了簡してやろ
ふ能く覺ていやアがれ〳〵トよらみ廻して立上り〳〵女能ふお出またおちかひ内よへ彌次
〳〵ほう〳〵此所を出れい〳〵
糞を喰らへ〳〵ハヽヽ〳〵
又しても祇園の茶屋よ田樂の。味噌を付たる身こそくやまき
夫より境内をいで元の四條通を行よ日も。はや七ツ下りとなれば。急ぎ三條に宿をも
とめ足休んと。たどり行。先に立て近在の女商人いづれも頭に柴薪あるゐは梯子。連
木。槌などを載て四五人打つれたち梯子。買はしやんせんかいにヤア連木いらんか
いよやア北八コウ見ねへごうせへな者を頭へのつけて行に彌次アノ又尻を振ざまわ
い〳〵ハヽヽ〳〵女焚木。買しやせんかいよやア〳〵此よ荷をおろし摺り火打よて煙草など呑て〳〵ト行き〳〵て河原よ出ると彼の女ども各々

やす〳〵彌次ハヽアア流石は都ぢや。どおつも小奇麗な。頬つきだ。ちとひやのしてやろふ
む〳〵か北八又お前。へこまされようと思て彌次馬鹿ア云な手前へじやアあるめへし〳〵トきせる
を出し女商人〳〵御無心なから火を一ツ〳〵トパッパ〳〵時よお前方ア。とんだおもてへ物を
の傍へより
よく頭へ戴置て歩行なさるの女さよどやわいな北八ナニ此くれへな物をおゐらなん
ざア廿貫目ゐる石を頭て振廻した者だ女お前さんハ温飩屋の粉な引じやわ
ろわいな彌次エヽ手前へだまつて居ろへ女お前さん方アどうぞ此連木買ふておくれ
んかいな彌次ナニ摺子木か。アヽ買てへが〳〵コリヤア〳〵細いわつちらが所ぢやア何でも材
木の樣なそして四角な摺子木で無ちやア問よあいねへ女〳〵チホヽヽ〳〵四角よゐた連木で
おむしすらんすなら大方摺鉢も四角じや。あろそいな彌次そうとも〳〵おゐらが。處
トやア穴藏で味噌をする〳〵ヨホヽ〳〵氣疎ささくなお方じやわいなアノ連木おゐやなら梯
子買ておくれんかいな彌次〳〵ハヽヽ〳〵梯子面白へいくらだ女けふハ何も能ふ賣んさか
い安してあぎよどいな六匁くだんせ彌次二百斗りなら引受樣さ女アノぢやら〳〵云

て来やをわいな。もちと買て下んせ彌次否だ〳〵女お前さんこなぬよ。あちやうして
あるわいなモシ五匁にあぎよかいな彌次いや〳〵女いゝわいな是。もつていんだら。
ひかられ樣。貳百よまけてあぎよわいな彌次ヤアまけるか情なねとをいふ女氣疎安
いもんじやわいな彌次いくつ安くても梯子を買て。どうするもんだ内を無くせに女
能わいなサア持ていなんせ彌次まぬつゝあやまる有樣はおぬらゝ旅の者で今宵ゝ三
條よ泊ろうと云のだから梯子を買ても仕方がねへ女何いはんすぞいな。いらん物を
附さんす事いなぬわいな彌次ソリヤもう直を附たが不肖だからいらねへ物てもを袂か
懐中へはいる物なら買てもやろふが何を云ても此梯子だからおろれる〳〵女ろじや
てゝわたしらをなぶらんしたのかいな。こちや商賣じやわいな。そなぬなといやじや
もていなんか〳〵ト女ども四五人口々に。やかましくしやべり立て。彌次郎を中にと
中々合點せず物見高ひ京の人たち何をやらんとおりかさなりてぐるりと取巻よ彌次
郎よげられもせず大きよこずりはてさま〳〵よ云わけし。又はりこみ云て見ても一
向聞入ずあひてゝ皆女のとも喧嘩よもならずせんかたなく錢貳百文出して彌次こ

ぬつゝ。いくちもねへめよわつた。北八ろこ
らまでかつぬてくれ北八エヽとんだををい
ふお前へ持なせへな彌次又一番へこんだど
うはらあ

如何せん梯子の親と此樣な
やつのぬ物を引受る身ゝ

斯て四條河原を寺町へ下りてもく。道々も
梯子の持おもりしてつぶやきなからナント
北八手前へ附合ひを知ぬ者だちとばかり持
てくれろへ北八いか樣お前へ心からとゝ云
ながら氣の毒なこつた。さぞおもたかろふ
あうしなせへアノ女どもの樣に頭へ乗て持

○通編中此レ最モ目貫

て見なせへ、彌次なる程〳〵（ト手ぬぐひをたゝみ頭へのせ其上へ梯子をのせ兩手ヨ持ろへ行と往來の人々）コリヤ何じやいな浮雲て成んわいな　彌次　ハイ〳〵（向ふがさつ張り見へぬへで歩行れぬ）（往來の人）コリヤじやうもんか行ろふぞや。お水もて出やしやんせんかいな（じやうもんが行とは火事が有さふなといふをなり）（往來）何所ヨしやうもんか行ぞいなアレあへ梯子持て行くわいなあほよ〳〵　彌次　何ぬかしやアがる往來ふぬけな我郎ドや（ハヽヽ）彌次　イヤ此べら作めら（ト梯子を頭へのせたなりヨぐつとふりかへれはかの梯子の（往來）アイタヽヽ何じやい。どめつろうな此人中あとさきヨて往來の人頭をこつつり天窓打で長いもの横たはしヨおくさつてゑらいあんだらじやな。のうてんどやいて。こませやい　彌次　ナニ戯言ぬかしやアがる往來私が額の疾癇がなふなつた。そこらにやなぬが見て下んせ　彌次　ヱヽおゐらがゐる者か馬鹿な面ゐ往來ゑらひ顔いな我郎じやたゝんでこませやい（ト何れもきかぬ氣の者共と見へて）（コリヤア）（此方らが悪かつた。どなたも御りやうけん下さりませサア〳〵彌次さんあやびなせへ彌次いめへましひやつらだ北八どうも。獨りでい持れぬ跡の方へ肩を入れて。くれぬか北八ドレ〳〵）（コリヤア）

○欲スレ振ントニ二百於梯子ニ

己までを。とんだ目ヨあはせる

これもまた咄しの種ヨはる〳〵と。京へ登りし梯子一脚

彌次　ヱヽ罰どころゑやアぬへどうぞ。打捨つて。仕舞てへゑのだが（ト今は貳百の錢もおゐからずやつかゐもの階子うち捨て行んと往來すくなき横町へはいりそつと捨おき逃んとすればおりあしく人ヨ見付られてとがめられせんかたなくのつぎあるく又何處ぞへ捨んと〳〵と思ふ内。うか〳〵と三條通（モシナお前樣がたお泊かいな　彌次　泊り〳〵宿引ヨ來りければ宿引と見へたる男）ちのうちかたへお出んかいな北八お前へ何所だ宿引ッィあこじやわいなサア〳〵お出んかいな〳〵（ト打連て大橋の方へ行）すでヨ其日もはや西に落て家ごとに灯火をてらし門さすまろ三條小橋を打渡りて彼の旅籠屋の方ゐ着たるヨ宿引サア〳〵お泊り樣ドやわいな亭主　コレハお早うお着で御座り升ヨいな　彌次　アイお世話ヨなりやす　亭主　お荷物ハ北八　此梯子壹丁　亭主　コレハ氣疎お荷物ドやわいなコレ〳〵お蛸や奥へ御案内ヤさんかい女　ハイ〳〵お出なされませ（ト奥へ案内するヨ連だちて二）（今晩ハお客樣がいこおすくのう御座り升さかいお湯は焚ませぬッィあこの小橋下るところヨ氣疎奇麗な

湯が御座り升是へなとお出なされ北八おねらアいゝから彌次さんお前へ行なら行てきなせへ京の水で洗ふとごうせいよ色が白くなるといふとだせ彌次此うへ白くなつちやアつまらねへからよしやせう亭主時よあなた方は近在からお出かいな北八イヤわつちらア江戸で御座りやす亭主いかなわしゝ又階子をお持なされたさかいコリヤ近在のお方でお宿へ買てお歸りなさるのかと存じましたがどして江戸のお方が階子を何よなされ升そいな北八イヤ是にゝ譯が有やすアリア江戸からとつかつて來やしさのさ亭主ソリヤ何としてあなゐお物を北八聞なせへわつちらがこゝろやすい者だが生れゝ此京の人て今江戸よ世帶を持つてゐやす。ところへ京の親元の方からはるゝとアノ階子をかつがせてよあしやした其わけハゝの親御が無筆と云ので人よ手紙を書て貰ふも面目ねへと云をかしてアノ階子ばかりよこした心ゝ登つてこいといふ心いきで御座りやせう。ろこでまさ其息子が返事をよこしてへが同じく是も無筆でいるはのいの字を書ねへくせよとんだまけおろみ。ヨつちらが今度御當地へ參る

と云たらさいはいの事だから言附けてへ物か有と云よよつて。隨分何んでも屆けて遣ろふといゝやしさら聞なせへきたねへ乞食坊主ひとりとアノ梯子をよこして是を親父の方へ屆てくれろといゝやすそこでヨつちがコリヤア梯子ハ能が坊樣ハ生て居る人だから持て行よ難義だと云やすと其男の云よはそんなら楷子ばかり持て行て京へ着たならどうぞ坊樣をひとり賴んで其坊樣よ撞木ばかりもたせて梯子と一所よ親父のところへやつて下せへといゝやすから（ソリヤア）なせろうするのだと聞やすとイヤ京の親元から

○撞木最咄シ

登つてこいと云てよこしたから其返事だと頼れて持て來やがたのさ亭主（ハヽ）梯子をやつて登れと云は聞へてドやが其お返事よ梯子と又坊ん樣撞木ばかり持せてやるとハどう云やいな北八ソリヤ登りさいが金のなねと云心亭主（ハヽ）でけましたわいな然しはる〳〵の御道中梯子のをなりや柳ありへもよう這入まいよさゞ御難義よ有たじやあろ北八イヤ中〳〵ろうで御座りやせぬ道中するよい楷子を持て歩行がとんだ重寶な物さ馬なぞよ乘よ梯子を揖て乘と途方もねへ乘よくてそして川々をこすよ徳な事が有りやす大井川でも安部川でも蕃越と云をすると川越の賃錢か四人前よかの臺の賃が壹人前へ出やすところを梯子持參と云ものだから川越の賃錢ばかりで蕃の賃が。かすりよ減やすお前方も是から若しも道中ゐなさることが。有ならかならず楷子持なさるがいゝコリヤ人の氣の附ねへ重寶な物で御座りやす亭主イヤ誰も道中するとてナニ梯子持て行といふ氣が附ものかひな（ハヽ）時に只今おつまやつた坊樣い愛でお雇なさるのかいな北八そうさ是非雇はよやアなりやせぬ亭主さよならさいはひのこつちやわいあ私し方に世話致ておきをり升。能坊さんが。御座り升さかい。是をお連なされませ只今お引合ヤましよかい（トたちあがらんとす）る北八肝をつぶし（モシ〳〵待てくんなせへ今急よ這入やせぬ厄界者の階子を引受てこまるさへあるに。亦生た坊樣を取込でどうするものだノウ彌次さん彌次（イヤ〳〵）（手前のか、りだからおねらいゐらぬが何よしろ其坊樣を早く頼がよさそうな者だ北八エヽお前迄がとんだことをいふ亭主ハテ今あなたの云てじや通りなら是非共お頼なさるの云やなねかいな北八夫いそうだけれど亭主なんじやあろと私くしへおまかしなされ北八そんなをよりおらア早く飯が喰てへ亭主御膳も今あげ升が坊樣い。どうじやいな北八ヲヽサ坊ん樣早く喰ひてへ腹がへつてこたへられぬ亭主ハイ〳〵かゝこまりまゝたわいな（ト勝手へ立て行と程なく女飯を出すゐよくじの内樣々むだれ共余りくた〳〵しければ罫す頓て膳を引たるに宿の亭主い北八がちやふくらよのつたかほしてあぐさみ半分是も不洒落者なれば年の頃六十近きうそよごれた髪むしやくしやの大坊主壹人いざなね來たり（イヤもう飯あがりましたかいな時よ只今お咄ヤましたい此坊ん樣で御座り升わいな（ト引合すれば此坊主鼻ぴゝやげにて鼻聲なり）ハイ是はひや

○此レ己ニ白ニフ坊主御免ト下地

○以盛衰記梅ヶ枝嘘言ノ穴非無間鐘苦言之種

うお泊なされました愚僧名い丸哲とヤます。内方の旦那殿がお咄しゆゑ。参りました

彌次　コレハ御苦勞サア〳〵是へ〳〵北八　コリヤ御亭主さんだん〳〵お世話だが氣の毒なとが有りやす亭主　なんドやいな北八　イヤ無躾ながらアノお方でい間よ合ますめへなせと云にちとばかり素人狂言でも仕たといふ樣な坊樣でなけりやアなりやせん亭主　リヤどまたもてなやいな北八　イヤ先刻お話しヤた通り先の親元へ行て登りてへが金がねへと云事を返事した上で彼の息子が三百兩なければ登られねへといふものだから其心いきをせにやアなりやせん。ところで彼の盛衰記の梅ヶ枝が無間の鐘の所作事。撞木を杓柄と。こち付て〳〵チヽ、チン〳〵アヽ三百兩の金がほしいなア。なぞと。其坊樣よやらかして貰はよやアならねへと云ものだから。むつかまい亭主　イヤよう御座り升此坊樣もありやうい馬鹿村髮の助とヤて以前い宮芝居の女形をやりたつた者じやさかい。ゑらでけドやわいな。さいはひこちの娘めが今無間の鐘。習ふてドやなに何もおぐさみ。淨瑠理かたらしてやらしましよかいな丸てつひやりましよかとも〳〵

我し。うめヶ枝をひやるさかい。何樣ぞへん太をやて下んせ彌次　コリヤ面白い鼻くたの梅ヶ枝よ北八源太い手前が相應だ北八　エヽ馬鹿ア云なせへ惡いしやれだ〳〵トまゑめよなり。小言云つて居る内。亭主が差圖よ十三四の娘三味線を抱へてくると。内の女房下女飯焚きまて次の間よかたまり丸哲坊をろゝのかしながら見物する彌次郎おかしく〳〵コレ北八アノとほり。かみ樣や女中たちが見物してじやが。壹番落をとる氣はねへかどうだ〳〵ト袖を引れて北八すこしうかれがきて〳〵いかさまけんぶつ樣見物が多いと張合がある。まゝよ源太よおれがなろふ其替りいひぐさい出たらめよ遣がいゝか丸てつひよ御座り升〳〵

サテお虎さんへん太の出端から遣下んせ彌次〳〵ハヽ、〳〵髭むしやくしやの梅ヶ枝もいゝが源太が幟を染返しさ着物着てゐるもめづらしい北八　コレ〳〵東西〳〵〳〵ト此内娘淨瑠璃を

かたり（夜毎〳〵ゑ通ひくる梶原源太景季千年せが奥を伺かへば丁度よい首尾。さいはひと。ずつと通れゞ梅ゲ枝ゝ巨燵ゑとんと身をそむけそらさぬ顔て吹きせる北八コレ何が機嫌ゑいちぬやら。めつきりともたせ振りわれらが様な浪人の鬱た襟ゑは つかれまい上るりずんどたつをまたぞやんせ丸哲座敷ひきばかりをふとめるひやふで 貫 知 笛 勤 けふこゝへほらはれたいふみでひらせて合点じやなぬか上るりゑくい男も目にもろき涙ゝ懇のならはせなり北八（ア、コリヤ（よるな〳〵嗅くてならねへろつちへぐつとよつゑ〳〵ごうせへゑ嗅い梅ゲ枝だゞ丸哲ひよりや聞へませぬへん太さん北八ヱ、寄夫なと云ゑコリヤ手短かゑ遣てくれうコリヤ坊主イヤ梅ゲ枝。産衣の鎧ゝどうした丸哲ひちなん即滅と三百目に曲たわいな北八ナニ打殺したッリヤなせに丸哲そもやわたしが便毒から骨疼ゑなつて山歸來呑程ゑ〳〵氣種ゝじく〳〵此ひやなを助たい斗 金 鼻 りゑひやねならたつた三百目で。ひくねむやなを落すが。ア、ひやながおしいなァ（三下り哥）二八十六で踏附られて二九の十八でつゐ其心四五の廿なら一期ゑ一度わしや

○曲三百目ニ是レ質難即生

帶解ぬ丸哲ニ、何じやの人の心も知ずゑ。ふたいくつさる。ほんゑひよれよ彌次イヤまつた〳〵（ト是も答へられず勝手ゑいつて以前の梯子見世の間に横たをしゑ考て手拭をたゝんで大盡ふう有しを引さけ來り。鳴居に打掛二階の氣取ゑて彌次郎中段ゑ登りながらゑちよいと頭に乘せて鐘（サア〳〵源太が母の安壽の役だサア和尚やらかしねへ丸哲傳へきく無間のひやねをつけば。有德自在心のまゝ。是より。はよの中山へゝ遥小夜鐘道ゝへだたれど。思ひつめたる。我念力。此手水鉢石ひしにもせよ。ひやねゑもせよ。心差所ゝ無間のひやね（トきせるおつとり色々ある金替の錢をばら〳〵となけ出しな（其金こゝゑと三百文打替の錢なけ山す御山おろしがら。自身に考やうるりかたる（此時彌次郎楷子の上より打ゑ山吹の花吹ちらす様にゝあらで丸哲、袋ゑ三文かしてゑ五文拾ひあつめてひやん百銅コリヤ雇れの賃錢先取とは有難い（ト彌次郎楷子の上から丸哲をとらへ（ソリヤやるのじやァねへ已がのだ（ト引たくろふとするゑ。丸哲ゝやるまいとあらそふ拍子ゑかるゑ居ゑ掛たる楷子はづれて彌次郎引繰りかへりどつさり落ると楷子ゝ丸哲の上ゑなり娘もひ腹の骨をうたれ（アイタ〳〵丸哲（ア、ウ、〳〵亭主どてわつとなき出せば彌次郎腰骨を撫さすりながら（タ、、〳〵したゞやい〳〵（ト家ぢうがうろたへて煙草盆引くりかへすやらあんどうを打こかすやら座敷中只まつくらとなり。なくやらわめくやら大さゞとな

○梅ケ枝之一芯自ニ手水鉢一釣ニ揚金玉一

り亭主やう〳〵あかりを持來り（コリヤ）（娘めいどうじやいィヤ梅ケ枝が。おかしな目をしをるわいコレ〳〵氣を慥よせいやい丸哲ァ、〳〵くるしい。わしや悶くりしてはつと思ふた。へいやらして。金玉が上の方へつ、たわいな（アイヤ）（彌次ソリヤ。こまつたものたモシ）（御亭主樣。梅ケ枝が金玉を釣ち上ました北八金玉のあがつたよい。い、ことがある先刻見ればこ、の見世に錢膏藥といふ看版が見へたが夫をぼんのくぼへはるとと金が下がる亭主なよいんすぐいな。錢膏樂。首筋へはつたて、何下がるものかいな北八ハテ下ける理屈さ。なぜと云なせへ。錢が上れば金が下がる亭主ェ、何のこつちやいな丸哲ァ、ヨしやどうやら能やうドやがいとさんいどうじやいな（宿屋の女房）（コレ誰など一ト汝り寸伯さんへいてたもらんかいな丸哲わしやもう能さかい醫者樣呼でこうわいな。其替りお寺へは誰など外の者やらんせ亭主ェ、何ぬかしくさるぞいい北八ホンニお氣の毒なこつた娘御い何所を打なすつた亭主ひ腹ゑらふ打おつたて、いたがり升わいな彌次痛いひ腹ゑ都の生れ人よどやされ。ひよんなめよわはれてァ

、お笑止千万なをた亭主イヤお前人の娘よ怪我さして口合ひどころじやあろまいがな彌次（ハ、ハ、）（人の娘よ怪我さきたといわしやどうやらはづかしい亭主イヤ笑ひどころかいなろうたねこなさんたちいけたいドやぞや彌次けたいとい何がけたいだね亭主何がといちよこいふてドや。よう思ふても見さんせヨしや此年まで宿屋しておつたが。つねよ梯子持て來た客をとめたよはなねわいな一体遠國のお方が何しよ梯子持て歩行んすやら。こちやとんとよめんわいな。もしも家根からおどり込來じや。なぬかと家内の

もんが放言てじや有つたが成程奇怪こと。まかねん衆と見へるわいな（ト亭主やつきとなり少し言ばあら〳〵しくいふ。此踊り込とい上方よてい夜盗の事）イヤお前おゐしなことををお踊り込といふゆゑなり元より彌次郎むか腹立なれば（ト亭主）いふわつちらア。ゑらき。ちやうめんのれ旅人様だ。おつよひねくつたことを云と。了簡がなりやせぬぞ亭主ヲヽいしこやの何云ふたてゝ。こなんたちゞ梯子持て御座んしたからおこつた事じやわいな女房是いなア。ろゐねな人よかまはずとこち來て下んせ。いとがアレ〳〵ひよんな目附してじやわいな（ト女房）けば亭主もうろ〳〵コレ見やんせ若も。いとめが死をるとこなさんは解死人じや。そう思ふて居やんせ。女房アレ〳〵たはひがなぬ亭主コリヤ目がもうゝの玄やアヤイお虎ヤアイ〳〵〳〵女房いとイのう〳〵（ト夫婦ハ娘をかきいだき。水よ氣付よとさはぎゝ）ニヽ（コリヤ）北八どうしたものだろうおらアもうこゝらよやア居られぬへ亭主コリヤ〳〵お虎死でくれなどうじやぞやい女房お虎イのう亭主お虎ヤアイ彌次ェヽ情なぬ。コリヤたまらぬ〳〵（トうろ〳〵して立た）（亭主）コレこなさん。どつちやへも。遣事成んぞ彌次ハイ〳〵何

所へも行ハ致しませぬコリヤ〳〵北八せんてい手前が惡るい何の有体よ云ばいゝものを。ちやらくら嘘をつぬたからおこつて。無間の鍾だのなんのと祿でもねへことを初めたから此騒になつた。元ハ手前が發頭人だから解死人ハろつちへ讓るぞ北八チヤとんだ事をいふ。當人ハお前だわい彌次そんなら拳をして。まけた方が解死人だ北八馬鹿ア云なせへおゐらアゐらぬ〳〵（ト此内醫者も來り藥などあたへ樣々かいばゝな〳〵安堵し彌次郎むねなせおろし落付て此上ハあやまるよしくすなしと北八を賴み段々わびとしてあやまり證文を書てやう〳〵と此いさくさおさまりけるもつとも北八加判よてしかつへらしく書たる其證書

一札之事

一我等此度平假名盛衰記淨瑠理之内安壽之役相勤候所實正也然る所梅ケ枝無間之鐘相撞候節其金是よ罷在趣申打替之鳥目投出し候迚梯子爲辻候故丸哲殿隱蓑御釣上被成幷貴殿息女ゑ怪我爲致候段全く右梯子鳴居ハ打掛候より事起り候趣預二御腹立一無二申譯一段々誤入候所御了簡被下

○彌次ノ顔色如レ見カ

○梯子故段々誤り入ル

添存候然る上は以來御宿御無心申候共梯子抔決而持參致間敷候爲二後日一仍而如レ件

月　日

當人　彌次郎兵衛

証人　北八

此證文よて事治り宿屋の娘も次第に心快く。中直りの酒汲みかはして。夜もふけければ二人りゝ頓て打臥たるに程なく夜明て家内の人々起立たる物音よ目を覺し支度調のへそこ〳〵よ立出るとて　彌次　コレハ大きにお世話になりやした殊よ色々な事でお氣の毒な亭主　御機嫌能おいでなされ　女房　若々お梯子が御座り舛わいな　彌次　イヤもう夫はこちらに置てくんなせへ今日は所々見物して晩ほど又お世話になりやせうから亭主否々お持なされろしてこちや晩程りゝお差合が有わいな（ト一体亭主は。此二人をうろんよ思ひねたりしゆゑ梯子も預る事きみ悪くいかなる後難やあらん）北八　ナントけふは何所ちのと請附ざれば詮方なく又かの梯子をかつき此所を出立方へまご附のだ　彌次　イヤまだ東よ見物してへ所が在ガマア今日りゝ北野の天神様へ行やせう（ト段々道を尋て堀川通よ出）北八　時に思ひ出した事が在るソレ伊勢の古市で京の人と一座したが慥に其人りゝ千本通中立賣とやら云たが北野の天神様へ行道だと云たじゃアねへか　彌次　チヽサ　邊栗屋の與太九郎か　北八（ソレ〳〵）其奴が所へ尋ねて行て酒でも呑で遣ろふじやねへか　彌次　ナニあだドけ　茄子びが呑せるものか　北八　ところをおゐらが術に掛て呑例ろふ（ト往來の人よ千本通を尋ね中立賣よ至り邊栗屋與太九郎の方へやう〳〵と尋當りて例の梯子を軒よ立掛て彌次郎）御免なせへ（ト格子戸を明て）誰じやいなコリヤめづらしい。ようお登りじやわいな　彌次　扨マアこの人ば與太九郎　誰じやいなコリヤ　伊勢でい大氣お世話よ成やした　與太九郎　何のいなサアこち這入んかいな　北八　ハイお久しふお座りやす　與太九郎　イヤ是はく〳〵まだ表よお連樣が有ろうじや　北八　二人斗り誰を居やせん　與太九郎　夫でもアリヤ何じやいな　彌次　梯子のをかへ　與太九郎　何ドや梯子お持せかいなコリヤ氣疎　北八　イヤお前への所りゝ中立賣ひよいと上る所だと云るすつたから。若高い所なら梯子掛て登ふと思つて態々求めて持參致しました　與太九郎（ハヽヽ）（おごけじやわいな。時よ何もお愛想がなねお支度りゝどうじやいな　彌次　コリヤ　イ今朝宿屋でたべたまんま中食いまた致おやせん　與太九郎　ソリヤお賴おみじやわい

○的事

外レ輝ト出ニス

松茸ノ話チ

酒

なさゝなとあげたいが此邊ゑ酒屋いなし北八酒屋いじつきゑれ隣りゑ有ゑやアねへかへ與太九郎イヤあこでも小賣は致しませんわいな。せつかくのお出お煙草でも上りなされ北八煙草い此方だゝら勝手ゑ致しやせう與太九郎お前方せめて最少と先へ寄てお出なさると氣疎者が有わいな桂川の若鮎生ておるのを塩燒か魚田ゑするとねからはから味いの何のと。云ようなこつちやなねわいな。イヤまだ四條の生洲が近いとお供ゑていこもの。あこの鰻い加茂川て酒してとつど違つた者じや氣疎味いがあ。喰そゑてあこは玉子燒を。ゑろふようまて。くはすわいな。何じやあろと。これ程ゑ大きふ切おつて。ぽつほと息の出るのを南京の薄皿に盛て出し居が味いと云ては。根から葉から含んで持やう ゑやわいなホンニ夫より又秋にお出なさると取々の松茸じや當所の名物で是が又外ゑいなねわいな。新らしぬのを。すましの吸物にして鳥渡山葵お飽として酒のお肴ゑ致そなら。とつともうなんぼ喰ふてもねからあさがなねわいな（ト咄し斗りして何も出さぬゆゑ北八こらへ兼ねそつと拔いで隣の酒屋へ呑にゆく咄ゑ身を入て與太九郎は一向北八の逃げたるを知らず）イヤ。最ひとりのお方い何所へいかんしたゞいな彌次最ふ歸りやした與太九郎はて扨ねからしらなんだわいな。いつの間ゑいんでゝあつたゞいな彌次今松茸のお吸物の出た時。中座致しやした與太九郎ソリヤ殘り多い後段ゑまだお菓子のお咄し致そもの彌次イヤもふ先程から大きゑお馳走ゑなりやせぬ。お影でひも ゑひお暇致ゑやせう與太九郎イヤお待あされよい所へお出たわいな。ちとあ咄しが有わいな。アノ伊勢の古市でおつき合申た時のことといな。あの時の入用金壹兩ドやあつたかな。わしや筭用違ひして金壹分貳朱こちから出ゑて置たさかいコレ見なされ道中の小遣帳ゑお娼屋の附も何もかもこなねゑ細ゑ書附て置たが内へ戻つて筭用して見るとお前方一人前百廿四文宛わしの方へお貰ひ申さねば筭用が合んわいな。わづかのこつちやさかい。どしてもだんなねが取ゑしくいなね。さかいお二人分。貳百四十八文お貰ひ申ましよかいな彌次エゝお前も今となつて。さたねへとをいふ夫斗りの事。うつちやつて置なせへこつちでも立替た事が有りやす與太九郎ソリヤあげるのかあらいあけるさかい云なされ筭用

○此ヲ是レ曰フニ數蛇ト

い算用じやァァこちへ取のが此通ドやさかい斯しよわいな。はしたまけて。わぎよゐいな貳百文くゐなされ　彌次ェ、外聞の悪い其時取は能ものを（ト小言八百云へ共合点せず彼是とせり合た所が果し附ず彌次郎面倒（與太九郎（ハ、、コリヤ（御きんとうじやわいな。是からお前方也とて二百文出ゐて遣ると）は天神様へいかんす気やあろ。そしたら序よ平野様金閣寺へ。いかんしたが能わいなおそゐるさかい早ういて戻らんせ　彌次大きよお世話（ト ふくれ顔して立出れば隣りの酒屋より北八よよつこりでてきたりて）どうだ御馳走が有りやしたか　彌次郎いめへましい目よあつた何の手前が尋てよらず共い、ものを錢貳百只取れた　北八（ハ、、ハ、、）どうして〳〵いゝ其代りアノ梯子のやつかいものを爰にうつちやつて置てこまらせてやりなせへ　彌次郎ナアニこまる者だ直よ賣て錢よするはあの野郎めに梯子迄只取られてつまる者か。やつぱり。かついでゆかふ（ト夫より道を尋々行く程に北野の下の森と云に至る爰い至て。賑やか よて芝居抔も有り見せ物豆藏よみ賣講釋。又唐茶釜と異名せしよしす張の水茶屋体なる者所々に在り是におかーきしゆかうあれ共作者思ふ事あればはぶきぬ。是より天滿宮社内へ掛る道よ菜飯田樂を賣。茶屋おびたゝしく有り赤前垂の女軒に出て）あなたお休んかいな菜飯お田あがらんかいな。茶々あがつてお出んかいな　彌次

モシ〳〵わつちらァ天神様へ參詣まてけへんよお前の所で休みやせうから此梯子をこゝ爰よ置てくんなせへ　茶屋ハイ〳〵お預りヤましよわいなお早やういてお出でなされ　彌次お頼みヤやす（ト梯子を茶屋の門に立掛置て行過て）ヤレ〳〵重荷おろした何のかへりよ寄る者ゥナント北八梯子を拾たちゐいどうだ北八ハ、面白くもねへ（ト經堂前より。うこんの馬場よ至る此所いいつも借馬數多出て馬の稽古あり見物おびたゝし（ト立よつて人をおけを乘人（ヒヤアドウ〳〵）（見物の時の聲）ワァイ引見物皆ゐらい手下じやな七軒戻かして。腰がふなつきおるアノおんよやく玉見るやうな天窓の親父めがゐらふよう乘くさるわい見物アリヤしれたこつちやわいな博勞の親方じや見物のいなアレあつちやの男見やんせ手綱をあやよ取てあなゐな手附してゐる。アリヤ大方織屋の手傳じやあろゐいそしてアレ〳〵十二坊の弟子坊が珠數つまぐる樣なをして手綱持てトやわいな北八巳も一鞍乘りていあ向ふに見てゐる姉樣よ（ト人ごみの内女連が二三人立て居る。後ろへ廻り見物ゐながら前よ居る女の尻をちよいとつめる）娘ヲ、痛やの誰さんじやいなコレお丸さんお前こち來て。かまんかい

なお丸何んじやいな娘誰じや屋らわしかおいどをつめりたわいあ年増の女ソリヤお
なごのなぬくよで生れた人さんじやあろぞいな。かまヨんすなほつておかんせ彌次
郎ニ、北八が悪い酒落をするなへ北八ナニかぬらァしらぬへ（トいひさま。よくさも
尻をつめつてやろふとわき目をまなからそばにより年（子ア、痛い）（トヨつとな）
増の尻と思ひおぶつて居る子の尻を思ふ樣つめると（く年増の女）
誰じやいな悪いことさんすヨいな（おぶさつて居る子）アノ伯父さんがつめつたわいのふ女エ
、すかん人さんじやわいな彌次堪忍しなせへさりとい外聞の悪い男だ（トあしばや
と此所を過て南の御門より（にすご）
入て天滿宮の本社へ參る
おまもりを首よ掛つゝとうとまん。宰府の宮をうつす神垣
北野天滿宮い昔し近江國北長社の神主長種神勅を蒙り朝日寺の僧。撮珍。右京の文子
等と力を合て靈祠を作り天德三年右大臣師輔卿疑々だる大厦を改め營み給ふ今の北
野の宮是也社頭よ渡邊の綱が納め玄といひ傳ふ石燈籠苔むしてあり
綱の名は今だよ朽ぬ石燈籠。昔しを今よ三ツ星の紋

東向觀音は梅櫻の二樹を以て。菅神御手ごころ刻ませ給ふところ也と云
御利益い四方よ香ほれる觀世音。梅櫻にて造り給へば
夫より社内をぬけて平野の社よ參る。此御神は。四座みて今木神。久殿神。古開神。比
賣神なり
こゝろよく飯くふ爲よ本膳の。平野の神を祈りこそせめ
こゝ茶に紙屋川の邊りよ二軒茶屋あり二人い空腹となりたるに支度せんと此茶屋に這入
ば女とも出向ひて能ふお出たわいな。ツイト奥へお出なされ彌次何ぞ味へ物が有か
ぬ飯も喰たし酒も呑たしマアちよいとした物で一盃早く頼みますぞ（ト奥のゑんさ
と女銚子盃を持出る者（きよ腰を掛る）
はほし鮎の煮びたし也（彌次早速是い有難へ女中一ツ汲給へチットありやす）（女
お看あざよわいな。コリヤわたしが心の丈ドやぞへ彌次ハア此鮎がお前への心い き
とはどうだ女わたしいナお前さんが川鮎と云こつちやわいな彌次コリヤ有難へそん
ならお前よわけやせう。ドレわつちも心いきの。有わけやせう女（チホ）（ホヽ）此生姜が何と

してお前様の心じやへ　彌次郎わしやは玄かみイ　北八（ハヽ、ハヽ）こぢ附る者だ時に女中田樂で飯を早く呉んなせへ　女ハイ〳〵（トやがておんな田樂と飯を持來る。ふたりは玄よくじゐながら見ればつゐたてのあなたよさもむさくろしき出家二人麻の衣のよごれたるを着て。是も田樂よて飯を喰なから一人の僧の云を聞けば（ナント役戒坊。貴樣髮ゐ何所で結ぞいの　役戒ヲヽ持戒坊わり樣もわしが結ところで結はんせ。あこゐ氣疎ようゆ結わいの。わゐや久しうのんこ髷よ結てじやわつたゞ。今ゐはやらんさかいコレ見やんせ雷子よ結て貰ふたがゐらふ氣持がようてたまらんわいな（トいひつゝ淺黄の坊樣身よゐ麻の衣着ゐから頭は卷髮にて芝居のやつゐといふ髮也。彌次郎北八是を見て肝をつぶしおかしさ半分。不思義ろうよ伺ひ見れゐ（役戒ハヽア成程よふ結くさつた。ヨしや又こちの弟子坊よ結せおるがもう〳〵月代ゞむちやじやさかい。見て下んせいつの間よやらこなゐに摺こかしおつたわいな（ト是も頭巾を取罪にあるそりさけ奴なり彌次郎（モシお隣りのお客樣わつちらは遠國の者て御座りあまりよ合点行そこたへこのねて（れは髮ゐぼんのやすが所々あるいて居るうち色々樣々な珍らしい事も見聞ゐやしたけれど御出家方の髮結たを見るゐ眞事に今が初め。どうも合点がいきませぬ。卒爾ながらお前方は何

所のお方で御座りやすね役戒ハヽア此の頭の御不審かいな。こちや空也堂の僧じやわいな彌次郎なるゐどな咄しに聞て居やした彼茶筅賣るお方だな役戒さよじやわいな。おちの宗体ゐ昔ゐから由緒が有て。こないよ身よゐ染衣を着しながら天窓ゐ大俗凡夫じやわいゐ彌次郎夫でおこへやしたがなぜ又お前方の居なさる所を空也堂と云やすね役戒さればいな。こちの宗体でハ。どしたこつちややら。代々皆ゐらい大食で飯じやあろが何じやあろが何ほでも能ふ喰さかい齋非時に呼れていても。しゐつけられて最つと空也どうドやいなと人殊よ云たを直よ空也堂と云わいな役戒そじやさかいコレ見やんせ鳥渡こゝへ來ても。二人でお鉢三盃喰たヨいな彌次郎ソリヤ途方もねへ大喰いだ尤もわつちらも喰た物さ何時やらも信濃へ行きやーた。ナニカわつちゐ飯ところで御座りやすから先朝ずつと起ると茶受けよとて座頭の天窓ほどあるにぎり飯を。出やすがわつちの。てやゐい子供でさへ夫を十四五程宛も喰やすわつちは折惡く氣分か惡くて。ろくよ食も喰やせおんだが。十七八斗も喰やゐたろう。ろう

○彌次亦將喰レト鉢サ

するとやがて飯ができさとつて。そこの亭主の云ふは。江戸のお客はおあんばいが悪いといふをだから。今朝は麥飯を焚ましたとつて。何がとろ〳〵汁を摺た程ふ摺鉢の二十斗もろこふ並べて有と思ひなせへ。そうすると椀へ盛が面倒だと家内の如等は皆其摺鉢一宛引受けて麥飯を其中へ山のようふ盛てくらひおる。わつちも絶食而前で居たが麥い大好物でこらへられやせんから。せめて一摺鉢もやつて見やうと喰掛たところが口當りが能から。ずる〳〵と。何のとなしふすべりこんでとう〳〵摺鉢ふ五六盃も喰やしたろふが。今では。とんと食がへりました役戒ソリヤお前も飯い弓人じやないわぬのナント飯盛りさんせんかいな彌次アノ飯盛が爰にも有りやすがね役戒ハヽ〳〵お前の云てじやれ。道中の飯盛ドやあろ。ろじやなねわいな。こちとらが仲間でするい酒呑衆が酒盛といふかくで飯をさがひふ喰あふを飯盛と云わいなちとやて見やんせ。幸ひこちもまだ飯の喰たらんさかい相手ほしさの玉手箱じや。わいな北八どうやら面白ろうなつたが夫いどうするので御座りやすね役戒ヤア何じやあろと。やて見なされモシ女中鳥渡來て下んせお鉢のお替りトや女ハイ〳〵（ト飯鉢ふ一盃持來る）役戒サアはじめんのい。イヤ亭主役ふわしのらやろわいな（ト茶漬茶碗ふ飯を盛てさつ〳〵と喰仕舞）役戒サア〳〵お前さろかいな（ト彌次郎へかの茶碗をつきつけ）お前もう一盃かさねなされ私すけてあぎよわいな（ト彌次郎が持たる茶碗へ飯を盛附る）彌次郎コリヤわつちが喰のかね役戒さよじや〳〵彌次ハヽ、アきこへやした盃を廻す心だね（ト彌次郎かの一盃の飯をくひ仕舞て）役戒コリヤ氣疎茶碗を役戒の方へ差とおさへましよかい彌次イヤまづ〳〵（ト持戒はてお前もう一盃かさねなされ私すけてあぎよわいな（ト飯の盛て有まゝ茶碗を持戒）彌次そんならお前すけてくんなせへ（ト盃盛附ると）彌次又一（ト戒に渡せば持戒坊三口程喰て）是も酒じやと附ざしじやけれ

ど飯じやさかい喰さしドや　彌次郎　エ、お前への其髭むしやくしやと。不掃除な口中で喰差いわやまるの然もソレ〳〵水鼻をたらしてさ　持戒　ナニいふてじやぞいな。そなねなといふて飯盛附合がなろこのいな早う喰んーて誰ヨなとさゝんしたが能わいの　彌次郎　ソリヤ情なぬさて〳〵飯盛といふものいきたねへ者だもふ〳〵わつちい御免なせへ　役戒　イヤお前麥飯摺鉢に四五盃喰んしたと云てじやなねかいな。ひきやうなを云んす。こうさんせ一拳いかんせ　彌次郎　そんなら拳で參らふか　彌次　よかろわいの其替り否や應とんといはさんぞや　持戒　サア〳〵薩摩拳じやサンナ　彌次　ムメで〳〵　持戒　トウライゑらいか〳〵サア〳〵上りなされろのくせお鉢のお替り云や　役戒　トかの茶碗の上へ盛添て　彌次郎めんだうなりとがまんをおこし。やう〳〵と喰仕舞へば　役戒　最一ッやらんせお鉢の替りめじや　彌次　イヤもふ御免〳〵　役戒　コリヤやくたいじやお前い田舍者じやな麥や挽割の交たのを上りつけて居さんすさかいこなねな一本木の米斗の飯はようわがらん者じやあろぐいな　彌次郎　ナニわつちらァ猪の牙のような飯でなくちやァ喰ひやせん

役戒さいな是が猪の牙じやゑいな　彌次郎　そんならお前替り目の。おひを頼のみやす　役戒　ソリヤよいはひ迎ものとよ大きおもんでおつもりに志よドやなねかいな　漬の入て有りし丼を打明て飯を盛りぺろ〳〵と喰て仕舞役戒坊へ廻すと是もしこたまよそて喰ひ仕舞な　サアあぎよわいな。イヤ飯でよちや〳〵ずる　鉢へ丼を入洗ひて　サアすまたわいのおつ盛じや〳〵　彌次　イヤ〳〵もふいかぬそ志てきたねへ人が雪隱へ入た手を洗つた手水鉢ですましたどんぶりそれでどうして喰るものか　役戒　そしたら此茶碗で　彌次郎　イヤもふ腹がさける樣だ夫ヨ聞、なせへ今の一盃やらかして居た時何か懷中のうちでぷつッりといふ音がしたからさぐつて見たら越中褌の紐ゞ切れる位に腹か張切りてきたものをもふ〳〵おゆるし〳〵　役戒　ハ、ハ、もふよしなされおつもりじやコレ女中何ぼ志や勘定して下んせ　女ハイ〳〵御一所ヨ致しま志よかいな　役戒　そじやわいな　女　御酒とおでんの代物い十文でよう御座り升がお飯い五百七拾貳錢頂戴とう御座り升　役戒　ソリヤ氣疎安いものドや割合ヨ致そかいな　ト此代錢勘定して半分の拂すれば　彌次郎　ソリヤあんまりだ。お飯いお前方がし

喰ニ精米ヲ
又飛ダ喰レフ
割サ

たたまわがつてわつちれたつた一膳か二膳喰たもの二ッ割とい不承知だね役戒何い
はんすぐいな一座で飯盛さんしたもの。よふ喰んいお前方の勝手じやなゐかいあ〜トや
つッかへしつ是も理づめよ彌次郎せんかたなくとう〜二ッ割にし〜北八〜ハハ〜ハ、い
て此所の拂をなさければ僧二人い早くも先よたつて出ゆきたるに
、見世物だサア彌次さんどうたいかねへか彌次チ、サ行てへがあんまり喰過てうど
かれねへ。どうぞ手を引てそろ〜立せてくれ北八エ、いくじのねへ。サアたちなせ
へ。彌次コレサ手荒くまて呉な飯が口から出るようだ北八テモきたねへことをいふサ
ア〜たちな〜〜ト云つ、彌次郎の手を取引立れば。やう〜よ立上り出かける〜女おゆるりとお出なされ北八ア
イれ世話よなりやしたサア〜彌次さん行かねへか。どうする〜

はじめから人を茶よゐて何盃も。やたらに飯を空也寺の僧

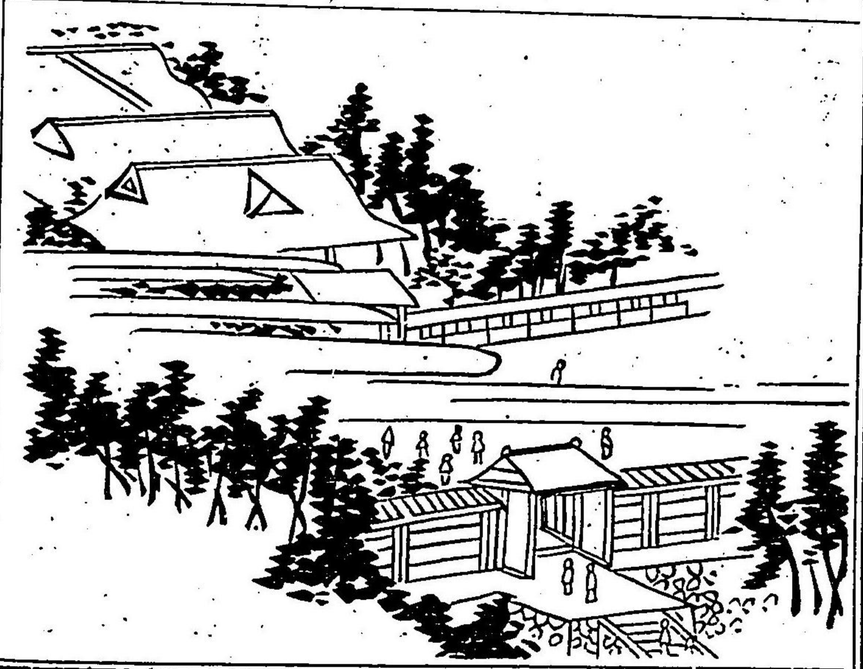
是より又天神の社内にかへりたるが。東の門より一條通へ出る道を。まらずうか〜〜
ともと來し南向の門をいでたるに思はずもかの梯子を預けし茶屋の門ちがくなれば
彌次郎心付きてまて〜先刻の梯子がやつぱりあそこに。立てかけてある。エ、こつ

ちの方へ來なんだらよかつゝ者を。北八又跡へ戻ろふか北八なるほどあろこへ休ま
ずよ直通よしたら。ひよつと見附ッた時の例の梯子を持て行と云だろふしと云て踞へ
戻るもごうはらだどうゞ能ちゐが有そふなものだ〜ト立ちどまりて。ゐあんして居る
が引て來たる〜北八イヤァいゝとが有ぞ〜〜内うこんの馬場の。借馬一匹博勞
を見るより前を通れば馬の影になつて居るからよもや見附いゐめへじやァねへか彌次郎チ、サ
夫が能コリヤ。大できだ〜〜ト扨より來たる借馬を見合せ居る内。やがてろばち
度かの梯子を預けゐ茶屋の前よ至りて馬はたちとまりてうおかず。ふたりはのけぬ
けて茶屋よ見附られていせんなしと思ひ同く馬の横腹の方へ附て立どまりゐる博勞
が馬を打て〜〜エ、此ならずめい何をゐをるのゐやロ日が暮るいやい〜ト打ともうごかずやが
て馬は小便しやァ〜〜彌次北八よ飛ばし〜彌次エ、コリァ又情なゐめにあふとだ北八ニ、嗅い〜。ワ
りはね小便だらけと浅〜ト飛のけ向の茶
レ彌次さんお前の方へ。流るい彌次ちくしゃう畜生めがとんだめよあはせる是い〜〜
屋の門さきゐ居る〜モシナ〜〜こつちやで御座り舛わいな。サアお這入なされ北八ッ
女目早く見附て〜ト一もくさんよ駈出せ〜コレナ梯子が
リヤこそ見附られた彌次コリヤたまらぬ〜〜ば茶屋の亭主とんで出

御座り丹わいな。ヲヽイ〳〵（トよび立れと耳よも入れす二人りハまつくろよ成てよける）兩人ハやう〳〵ど息をはかりよかけだして下の森を打過元の千本通よいで今宵ハ島原の廓中を見物して安見世もあらハ一宿せばやと申合せて往來の人よ道すがらをたづね千本下りて行程よ町を端なれて東寺よ至り

手折んと手をだす人ぞ見ならめ
東寺わたりは花の盛りに

夫より壬生寺よ參りて爰よ接賓門先にたてよせたるあやしの茶見世よ引こまれて其夜の宿と定め打臥たるがあくる日島原

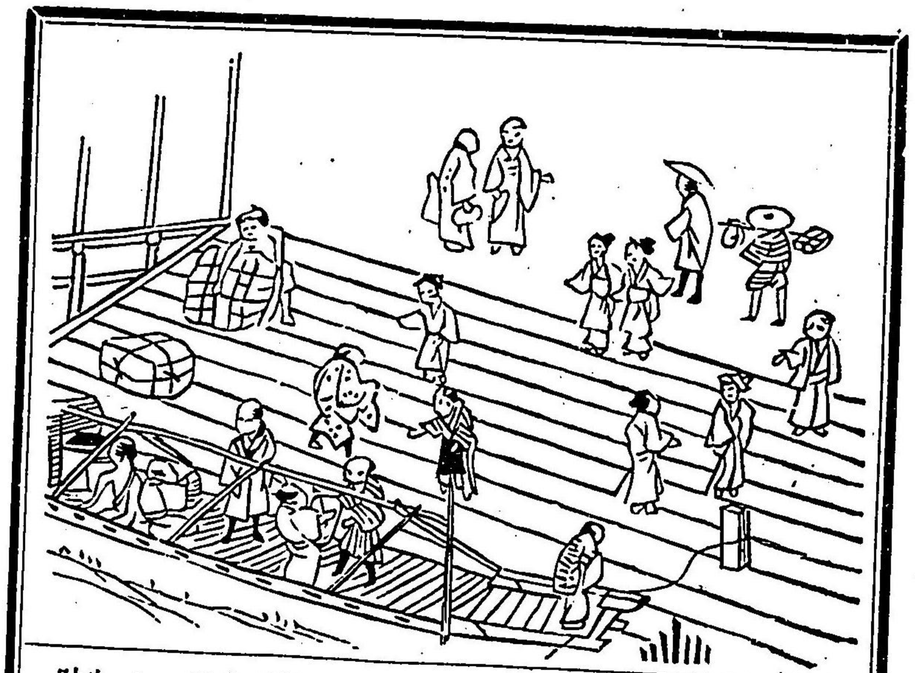


を見物し朱雀野より丹波街道を横切に淀の大橋よ至り。爰より下り船よ打乘て大坂へと。おもむきける

○八編

押照や難波の津ハ。海内秀異の。大都會よまて。諸國の賈船。木津安治の。兩川口よ。艫を並へ。碇をつらねて。爰よ諸々の。荷物を鬻さ。繁昌の地いふばかりなし。殊更花の春は淀川に掉さして櫻の宮に遊び。網島の鮒卯よ醉を催ふし夏ハ難波新地の納涼に螢を狩。豆茶屋よ腹をこやし。秋ハうかむ瀬の月。冬は解船町の雪景色。四季折々の詠多かる中に。目枯ぬ花の曲中は。いつも盛の春の如く賑ひ。道頓堀の芝居ハ常も顔見せの心地して群集絶ず。かゝる名譽の地を。見殘すも本意なしとて。彼の彌次郎兵衛北八なるもの。伏見の畫船よ途中より飛乘して。早くも大坂の八軒家よ至り。爰より船を上りたるハ最早黄昏時よ成て東西をしらず。南北を辨へされば人に尋問ひつゝ。長町を差て行程よ。堺筋通を南よ日本橋よ出たりければ宿引さども爰よ居

○大坂多レ川船順レ之朝暮船頭押ニ居艫一此所ニ以ン有ニ押ン照ル冠辭一哩



合せ両人を見掛て宿の相談を。しかくるに。早速さはまりすぐさま。此長町七丁目なる分胴河内屋と云よゞ連行ける〈宿引先よ〉サア〈〉お客様お供して來たるいな〈宿屋の番頭〉是いようお出なされましたれいくたり様で御座り升 彌次 ハイ同行四十七人番頭ナニ四拾七人様コレ〈〉おさん殿や大勢様ドや西の奥の間をうちぬいてあけさんせ。よう奇麗よ掃だしたが能わいの。コレ久三お足お洗ひなさるお湯ハどうドやいぬるうてもだんなゐ水なとうめてあけませい。早う〈〉。時よもし其四拾七人様は。いこお跡かいな

彌次 イヤ是ハ先達て鎌倉へ發足われ〈〉兩人ハ是より泉州堺の天川屋へ番頭ニ、何のおつちやいな。やつはりお二人のいな。コレ〈〉おつんやおふさり去やといな。こつちやの。お一人居しやしやる。せまい所よさんせ おつんハイ〈〉御案内。致ますましよかいな〈ト此内両人ハ足を洗ひ上りて見るよ。此宿ハ當所随一の大家にまて凡そ間數七八十も有と云り。両人女に連られて行よ奥の口元の六畳斗なる小座敷へ這入外よ。一人此間よ泊り合せおるとなれハ番頭〈御もるしなされませどうぞもし御究屈よ。御座りましよが。御一所よなされて下さりませ〈此旅人ハ〉〈丹波の人〉だんなゐてや。サア〈〉こつちやへわせさつしやい 北八 是ハ御免なせへ彌次セレわちらア二三日も逗留して所々見物がしたいからお頼みゆます 番頭 ハイかまこまりました。先御ゆるりと〈トいひ捨て〉〈勝手へ行〉丹波コリヤ我りよたちハ何所から。來よりました北八わつちらア。江戸て御座りますお前へハ丹波わーハ丹波の笹山在郷。今度高野へゆきよります。コリヤわじいな縁て相宿しより升わいな 彌次郎 兎角旅は道連お心安いがよう御座いやす〈ト此内〉〈宿の女〉〈飯上げませうかいな〉〈ト三膳もち來りすへるしよくじの内色々あれ共累すやかて飯も濟湯に〉〈お療〉も入て仕舞と。大あばたの女按摩いやらしき風にてさぐり〈〉來り

治はよう御座り升かいな。どうぞもましておくれんゝいな彌次イヤ按摩さんのお前女だの。然も生ていらァ。北八どうだもまねへゝ北八こつちから揉で遣りてへあんまテ、おかし。何云ぎややら。お前さん方ハ。お江戸ぎやな。わしやアノお江戸のお方が好じやわいな。殿たちハ男らしふて。物いひじやとこが。ぎらいすばりとして。よいわいな北八お前さつぱり。めが見へやせんか。見へると此内にとんだい〳〵男がねるよ見せてへ肝ァあんまぞぎやわろぞいな彌次郎ナント按摩さん此男よりわつちがいゝ男か。そふ云て年ハ。どつちが若い當て見なせへ。當つたなら二人あがら揉で。貰ひやせうあんまソリやいつきよ當るわいな北八コリヤ面白へ。サアおいらはいくつ位だあんままちなされお前さんハ廿三四北八コリヤ。コリヤさつねハ。男ハいゝ男だろふねあんまさよ!!やお顔ハよう道具が揃ふて ぎや北八かけて有てつまる者かあんまお目がぎらい。いつかなお目じやあろがな。そしてお鼻が北八高いか。低いか。あんまこういふたら。れ腹立か。ぎらんか慥かよ獅子、舞鼻じやあろぞいな。丹波〔ハヽ〕〔ハヽ〕氣疎〳〵

○兩個又會ニフ女兵ニ財符城將ニス落陷ニシント

彌次郎おゐらはどうだあんまあなたハ。いおふけておるでぢやわいな。お年は四十ばかりで。お色がくろふて。鼻の平たい髭だらけなお顔じやあろがな北八奇妙〳〵按摩ろして。ぼやけ太りによう肥て居なさるじやあろ彌次郎イヤ違つた〳〵おいらいひんなりとして色男北八嘘をつく。コリヤ按摩さんがかちだ。揉でやりな彌次郎約束だから仕方がねへ。爰へ來てくんな按摩〔チポポ〕〔ヽホヽ〕夫へ參せふかへ〔ト彌次郎がうしろへまわり揉よ〕かゝると此うち女の菓子賣。箱をかさねて持來り〔ようお泊りじやわいな。菓子ん買ふておくれんゝへ北八ヤァ段〳〵と出てくるハ。中々いゝ菓子だぞ。お前わつちらに。賣氣か菓子うりさよじや。こちやおまねさん方よ賣とうて〳〵。ならんさかい。やう〳〵走り舞ふて參じたわいな彌次上方の女中は手が有の菓子賣手も足しもなねがむちやよお前さん方にほれたのじやわいな。そふ思ふてどうぞ菓子を買ふておくれな。ドレ茶々汲でさんせふかへ〔ト菓子箱を突出し〕北八ニ、顔のよくいほどしやべる奴だ〔トいひつゝ。彌次郎よ目くばせしてろつと菓子の箱の下よかさねてある箱より。何やら菓子を五ッ六ッ取出し。うしろへちやつとかくすと。かの按摩手を出して。其菓子をろつと引たくり袂へ入る

を。北八一向にしらぎ。彌次郎も同く菓子三ッ四ッ取出に。勝手より人音するもちやつと箱を元の如くかさねて置。かの菓子ハ後の方へかくすを。按摩とつて是をもうつとせしめてたもとよ入るを。彌次郎も一向よ夢中作左衛門也。此内菓子賣の女茶を汲で盆にのせ持來りて（サァぬくいのをあがりなされ彌次せつかくおまへさなさつた者をまんざらすげなくもしられめへ（ト菓子箱の内より）是ハいくらだ菓子賣ハイ〳〵四文宛じやわいな。ソリヤ。もむなねこつちやあがつて見なされ（ト拝べ立てす、むるよ。彌次もてくらふ北八（北八も丹波の人もてんでよ取（コウ待ねへむせうよ喰て數が去をめへ菓子賣よ御座り升何ぼなと上りなされこちや只でもあけよわいな。ノウお蛸さん按摩さよじやわいな。サァよう御座り升こつちやのお方。もみましよかいな彌次郎チヤもふしめへか按摩サァあなたわしがねきへよつてかしんかいな北八ッレよしか〳〵菓子賣茶々も一ッ上りなさらんかいな按摩お鍋さん御馳走なされ此おか

た〳〵。ゑらひ御心よしじやわいな。サァあなたお横よ北八もふ肩むしめへか。ぢうぎよはしよるの丹波コリヤわりさま。たちのくちまつよか〳〵つて。ゑらふくはしん喰てけけた何ぼぞい菓子賣ハイ〳〵お三人様で。貳百四十八文で。御座り升ヨいな彌次ヤァとんだをを云何ろんなよ喰物か北八いくつた北八されば。いくらで有たか。丹波わしい四文のを五ッ喰から。ソリヤ二十やるぞ北八ろんなら跡い二人で。出すのか馬鹿〳〵しい。菓子よりか旅籠の方が安い菓子賣ろトやて、。上りなされた物をしよをがなねじや。なねかいな（チホ、ホ、）彌次イヤ（ヨホ、ホ、）ところじやァねへ。とんだ目にあいせる（ト小言い、なからせんのたなく銭を拂やると此内あんまも揉て仕舞）北八あんまさんいくらだあんまハイふふたりでおあち一すじおくれいな北八ナニ五十宛ろコリヤ高い〳〵（ト是もあとく百文出し遣る（彌次上方の女よやァ。油斷がならねへ。然し菓子賣めが。おねらを能と二人い立て行）（ト是非なよふよしたと思つてけつかるであろふが。そふいとらの皮。こつちよも。荒神様が。あらァ。馬鹿な頭な。とつくよ上菓子をこ、よ。はへ附て。置たを去らぬやつさ（トうち去ろをさ

○雖モ人ニ喰ニ菓子ヲ不レス喰ニハ其手ニ彌次敗北或ハ莫ニ再戰之意

がすよさつきの菓子見へぜ。北八も同く炙におゐた。はづだとたづぬるに一向見へず。勝手より茶碗とやくわん持いでよお袁花がでけました〕〔ト置て〕〔北八〕エ、今のがあると丁度いゝのよどうしたしらん丹波ソリヤいんまの按摩取めが。とていんだもんじやあろハ、イヤ爰よゐい物がありよる〕〔ト後ろの柳ごりをあけて〕〔サア〳〵コリヤ道修町の店で貰ふてきよつた砂糖漬じや。茶の子に一ッやらつ玄やれ〕〔彌次〕コリヤ有難へ〔彌次さんどうだ。たんとやらかしねへ〕〔丹波〕イニヤ。ろなねよ喰て貰ふていならんわいこち貰れ〕〔ト引たくりて。〕〔ろふ〳〵よしまふと此内女布團を引ずり來り〕〔もふれ床のべましよかいな〕〔トろこらとりかたつける内勝手より今ひとれればやつぱりいんまのあん〕〔彌次〕モシ女中〕〔トろこらとりの女。枕布團を持來り。ほうり込で行を見ま取なり皆々肝をつぶし〕〔女〕左樣じやわいな〕〔北八〕どうゐて目が見へる〕〔女〕アリヤれ客さん方へ出るよ目明でかれいれこゝろおきが有て悪いさかい。お嬢敷へはあなねよ目の見へんふりして出て玄やわいな。爰の内方ですぎられ升さかい。いよしなよい。いつもあなねに勝手手傳ふて玄やわいな〕〔彌次〕ヤア偖いおゐらがことをよく當たもつだ目が見へる者を〕〔北八〕そん

ならおゐらがものした物も。物じやアかつたに違へいねへ〕〔女〕チヽおかしお前さん方の源四郎してゐや菓子ん玄やてゝ。わたしもこなねに貰ふたわいな〕〔トたもとから出らひ勝〕〔北八〕大笑ひ〳〵〕〔彌次〕やつぱりわつちが。下つ腹よ毛のねへのだハヽヽヽヽ手へ行〕〔して見せうちわろく〳〵よ按ア〕い取ず菓子迄も。こちよ目の無ゆゐよ取れた斯打興じつゝ。夫より三人とも蒲團引かぶり打ち臥たるよ。丹波の人いはや先よ高鼾かきいだせど。二人いまだ。寐もやらず。彼是と咄しあふうち裏通りの畑けよ犬の聲聞へ割竹の音。時の太鼓も早九ッの數。打過る頃。北八天窓をあげ〕〔コレ彌次さんお前ごろ〳〵と何をする〕〔彌次〕なぜか。あんまり寐られねへから。ふつと思ひ出して。コレ見や足でこんな物をかきよせたい〕〔ト夜着の中からちねさな〕〔北八〕チヤろりや先刻あの人の出した砂糖漬じやアねへか〕〔彌次〕コリヤ聲が高い。柳ごりの脇よ出て有を先刻から。よらんで置たからよ〕〔北八〕コウ一ッよこしねへ〕〔彌次〕さて〳〵〕〔トあんどうくらいさねはわからず。かの曲物のふ〕〔ト曲物を引と是もつまたを取一ッつまんで口よかつちり〕〔彌次〕コリヤかたい〳〵〕〔北八〕ドレ〳〵〕

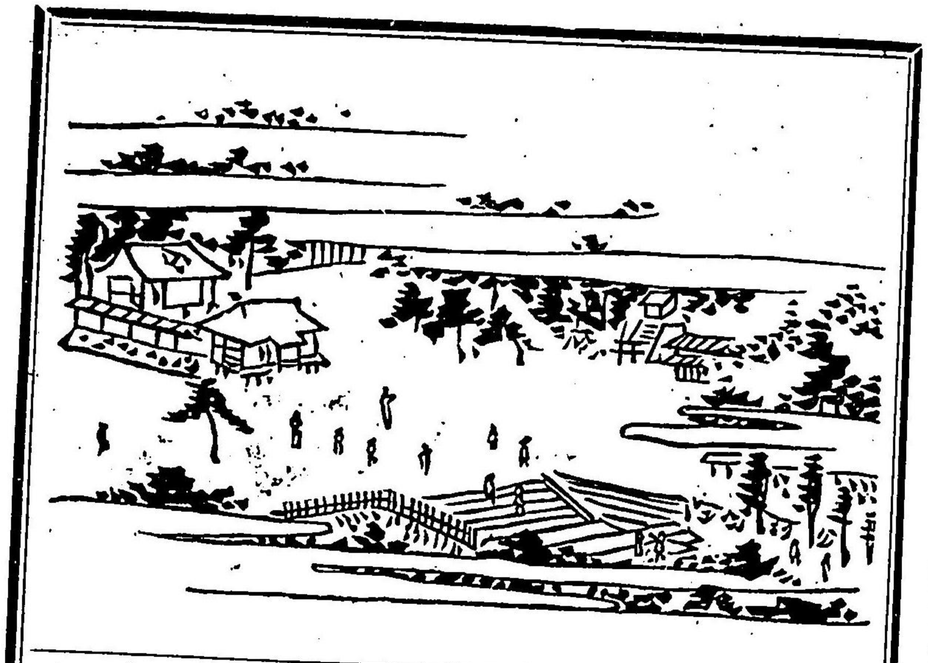
んで口にぐしやりよちや〳〵（エヽ何だいつそ灰たらけな物だ〳〵〳〵ペッペッ）彌次（コリヤ砂糖漬じやアねへ。何だかおかしな匂ひがする）（ト胸をわるくしてゲイ〳〵といふ聲をきゝつけ丹波の親父目をさまし此体を見るよりびつくりしはね）（ヤア〳〵〳〵わり樣たち。コリヤ何しよる。わしが女房をなんぜ喰よる）彌次（おきナニお前の噂樣たア。何のこつた丹波何のこつちやとい情なねわいの。ソリヤわしが知音。女房じやわいな。其入物のふたをよう見やゝやれ）（トいはれて。彌次郎とんで起のふたの書附を見れば）彌次（ハア秋月妙光信女。ヤア〳〵〳〵そんなら。此曲物いおまへの噂樣の骨だな）北八（ナニ骨とハコリヤ。大變〳〵。どをりで胸がむかつく。ニヽどうしよふ）丹波（わり樣たちの胸の惡くなつたより。わしの胸がつゝばつたわい。コリヤわしどもの村の。所法則で。其骨を高野へ納めよ持てもさをるので。御座るわいの。ようまア大切なお。ほとけをなんぜ喰よつたわり樣たちい眞人間じや。ありやしよまい鬼か畜生かどしたのじや。いや〳〵）（トたもとを顔よおし當ておね〳〵と）（なく彌次郎もおかしさ半分腹立て）（エヽむつかしいこたアねへ。おまへが。先刻柳ごりをあけた時ころげ出たを知らずよねたのいろつちの

無調法。夫を砂糖漬だと思つて喰たのがこつちの麁相。ソリヤ五分〳〵だ何もいさくさいねへわあ丹波イヤ〳〵きかんきかん元の通よ。まどうてかへしや〳〵）（トいきつてなみだまドりにわめきちらせば。北八色々とはりいひさま〳〵なだめ。すかしてやう〳〵となつとくさせ誤りければ。彌次郎も心の内おかさまぎらかしてイヤもう。面白次第もねへのさ

人の骨喰もをゝり若いとき。親のすねをもかぢりたるみゝ

此彌次郎が口づさみよ。丹波の人も心解て笑ひを催ふし漸く機嫌直りて打臥たるが程なく。一睡の夢覺て夜明ければ。勝手より起しに來たり手水つかふやいな。膳を据るよ。三人とも喰しまひ。丹波の人ゝ高野へと出て行く彌次郎兵衛北八ハ二三日逗留のつもりゆゑ。今日ハこゝもとの名所一見せんと。支度するうち番頭出てコレハお早う御座り升。今日ハどつちやへぞ。お越て御座り升かいな。さよなら御案内の者お連なさるか。よう御坐りましよ彌次（ホンニ夫をお頼申やす）番頭（かしこまりました。コレ〳〵左平治殿。鳥渡ごんせ）（ト勝手より案内の男を呼ぶ）あなた方か案内頼とおつしやつ

てドや北八モシわら草履二足買て貰ひてへの彌次イヤ一足でいゝ。おねらは京雪駄買て來た。どうもわら草履ではみすゝ田舍者の上方見物と見へて惡い北八ナニ旅で見へもへちまもねる者か左平治お仕度がゐいなら出掛ましよかいな彌次サア〳〵早く參りやせう爺頭女共いてお出なされませ（ト是より三人打連て此宿を出かけて）左平治ナント斯致しましよ。天王寺生玉い住吉御參詣の時よ。お參り成れ今日いてつちやの方へさんせうわいな〳〵ト長町通りを北へ。ひのうへより高津新地に出まづ高津の御宮よ參る。爰ふヨ無く社内に豆腐田樂の昔し仁德天皇の高き家よ登りて見ればと詠じ給ひし舊地よまて繁昌い茶屋參詣の人を呼サア〳〵お這入なゝ是へ〳〵お休みな〳〵〳〵（きしん淨王留理の木戸）今じやア〳〵紙屋德兵衛天滿屋おはん。瓦屋橋白木屋の段。次い千本櫻の天川屋辨慶の腹切出語りじやア〳〵（遠目鏡のいゝたてサア見なされ〳〵。大坂の町〳〵。蟻の這まで見へ渡る。近くば道頓堀の羣集。あの中よ坊樣が何人ある。お年寄にお若衆お顔のみつちやが何ぼある。女中方の器量。不器量ほつこり買ふて喰て御坐るも。濱側で。しゝなさるも。橋結の非人どもが襦袢の虱何ほ取たといふ迄。手よ取樣よ見ゆるが奇



妙。又風景を御覽なら。住吉沖。淡路嶋。兵庫の岬。須磨明石。大船の船頭が飯何盃直喰た。何喰た角喰たも。いつきよ。わかる。まだ〳〵ふしぎは此目鏡をお耳よ當ると芝居役者の聲色。附け拍手木のかたり〳〵。殘らず聞へて見たも同前。お鼻をよすれば大庄の鰻の匂ひ。ぷん〳〵と。あがつたも同前。只の四文では見るがお德トや千里一ト目の遠目鏡。是じや〳〵彌次目鏡屋さん音に聞た新町とやらも近く見へるかね目鏡屋さよじや。此お山のツイ傍よ見へるわいな彌次夫じやア近く見へるのドやアねへ遠く見へ

るのだ目鏡屋なせもし彌次ハテ此高津と新町との間だいたつた壹寸貳三分やかねへもせぬものを目鏡屋ソリヤお前大坂の繪圖で見てかいな彌次左よう〳〵（ハヽ、ハヽ）先お宮へ參ろふハヽアいか樣ねヽお宮だ（ト三人共神前よ）（ぬかゐさ奉りて）

もろ〳〵の神に脊競べしたまいゞ。さこそ高津の宮のとうとさ

是より境内の石段を西におりたち。谷町通よ出たるよ。何とやら腹淋しくなつたれば。幸ハひと居酒屋めきたる見せを見附て立寄彌次モシ何ぞ有やすかね（酒屋の亭主）ハイ煎殼よ鳥貝緋昆布卷じやわいな北八さつぱりわからぬへ。其内味へ物なら何でもいヽ出してくんな亭主ハイ〳〵いつきよわざよわいな彌次イヤ一升は入らぬ三合斗りたのみます北八時よ尾籠ながら用達よいつて來よふ。雪隱ハ何所だチヽ有ぞ〳〵（トえんさきより向へまはりて雪隱へ這入）（彌次サア一ッはじめなせへ）（案内左平治）マアあなた。かと此内こなたにハ酒有出さるよ（彌次ろんならお先）（チトトト）アヾいヽ酒だぞコリヤ北八。早く出ねへか酒か皆な。なくなる早く〳〵（トせりたてられ北八雪隱の内よてのみたくてたへられず）北八チヽ合點だ今出るぞ（トうろたへ戸をあけず

つと出た所が。ふしぎなるかな。酒屋の内よていなし。ろも〳〵此雪隱は二軒前の雪隱よて。此酒屋と裏よすむ人の家と兩方よて遣ふ雪隱なれハ。あなたおもこなたよも兩口あるゆゑ。北八うろたへてはねりし方の戸をあけて出たるもろよろの内なり。隱居らしきぢゐ樣一人。何やら小細工して居りしが北八を見て肝をつぶし目鏡の上からじろ〳〵と見るに。北八うろ〳〵と一向合點行ずまごつく内彼隱居（モシ〳〵こなんハ誰じやいな北八ハイ是ハ違つたそうな。モシ酒屋へはどう參り升へ隱居ハヽアよめさわいの。こなんハ表の酒屋のお客じやな。其樣側を左りよ取て直よいかんせ北八（ハイ〳〵コリヤ）行どまりだ隱居其戸を明ていかんせ北八ハヽアヽア又元の雪隱へはねらにや。行きねへか（ト雪隱の戸を明んとすれバ内よ）（エヘン〳〵）北八南無三寶道がふさがつた（トいふを聞て雪隱の内より）彌次北八かおつな方へ出てゐるの北八イヤ彌次さんだなおゐらア戸まどゐをしてとんだめよわつた早くそこを通てくんねへ（ト戸をあけよかゝる彌次郎内より掛金を掛て）北八もちつと待てくれきしていけむとア大毒だといふこつたのら。ひとりでよ出てくる用節を待て居るのだによつて。少しひまがゐる。アヽ退屈だは金ようらみでも詛ろふか。北八そこで口三味線頼むぞ北八エヽとんだをを云早く出なせへ〳〵（トそとからお世共あらず内よいゆう〳〵と道成寺の唄）戀の

手習つゐ見習て誰ゑ見しよ迎紅鐵漿附よぞ。みんな主への心中だて。ヲヽうれしく〳〵北八氣の長へ何のおつたと　彌次　末へこうじやよなァ。そうなる迄いとといいずにすまそぞへと誓詞さへ偽りか。嘘か誠かどうもならぬ程あひよきた　北八（エヽコリヤ）早くでねへか〳〵（ト云共内ゑいさつぱり何の音さたをなさゆゑ北八せきこみ）どうだもふ出たか（エヽコリヤ）彌次さん（ト云うちしはらくム）ヽンといふ音がして（ふゥつヴり。悠氣せまねぞと。たしなんで北八コレサどふするのだ　彌次　もふとつくに能が。待やれ山づくし迄やらかろふ　北八　エヽ馬鹿なをいヽなせへ（ト いひさま無理ゑ戸をつよく押せバ掛金ハずれて。北八雪隱の内へころげへ北八ぐるめよどつさり（彌次　アイタヽ、亭主（はしり来りて）コリヤ何じやい雪隱の戸が役と雪隱の戸ハやぶれる　北八　体じや　北八　イヤせんていお前へかたァこんなゑ両頭の雪隱ゑして置からわるい　亭主　ろじやて、二人連まふて雪隱へ行どいふとがあるものかいな。あほらしい　彌次　堪忍してくんなせへ。わつちらが悪かつた（ト 膝かしらをさすり〳〵）左平　何となされたぞいな　北八　うみ身ゑハ酒が能といふとだ早く一盃呑ーてくんな　彌次　こゝハ附が悪い

又先へ行て呑やれ（ト 爰を勘定して出かけると酒屋の亭主ふしやう。ぶしやうあひさつもせず。小言をいひながらふくれゝへりて居るを。二人ハおかしく爰を立いづるとて）

でるとのおろゐ早ゐてあらろひし。これ宇治川の雪隱かろゐ

夫より谷町通りを安堂寺町より。播場の原にいで咄し物して。たどり行程に。やがて天満橋ゑぞ至りけるっ　まとや淀川の流れ廣く。行かふ船ども漕違ひ棹差合て唄ひ。或ハ遊山船ゑ三味線太鼓はやしたてゝ行を橋の上より往來の人たち留りて（〳〵ヤアイ）おどれら。そなゐに。奢くさつても内へ歸だら借錢乞ひに。せがまれて。吼れろがな。えらひ馬鹿やあほよ〳〵　船中の人　何じやい。其方が馬鹿やわい　橋上の人　何ぬかし。くさる。己等らがあほじや　船中の人ヲヽいしこやの。あほ兢せうかい。こちにハ。よふかなやしよまいがな　橋上の人　何の己等らゑ負てゑいものかいっ　こちやあほのゑらひのじや（ト むせうゑりきみかへ）ハテゑいわいの。こなはんがゑらひあほハ皆しつておる。る此男の連と見へて　こつちやゆつて置んせ（ト 引ばつて連て行と跡から往來の人口〳〵）ヨウ〳〵あほのゑらひの〳〵ハヽヽ

（此内彌次郎北八も群集よおされながら此橋よ差掛り橋上と船と喧嘩。いづくにもよくあるやつと心おかしくうちすぐるとて

眞黑よなつてはちたつ喧嘩とて。あほよ〳〵と烏めがする

夫より此橋を北へおり。市の側通を行よ。爰ハ青物。市たつ所よて殊よ。繁昌の地なりける

青物の賣り買ひながら商人に。尾ひれの見ゆる市の側まち

程なく天滿宮の御社よ至るにまことや神德の彭々たるは參詣の人。どよみにあらはれ料理茶屋の赤まへ垂。門よなまめき。水茶屋。楊弓場の肝張聲。往來の心をうごかせ。わるい仙助が能狂言。忠七がうき世物まね。其外山海の珍物。見せ物芝居輕わざ曲馬乘。境内よ充々たり

なよひとつ御不足もなき御繁昌。事直よ自山自在天神

斯て社内と〳〵く順拜し。靈符の女の眞白き顔を横目に見なし。小山屋の門をも。むなしく打過ぎ天神橋通よいでたるよ。彌次郎のはきたる雪駄いかがしてや。横鼻緒

○以出テ分々々ニ認ニ履物直ト是レ履ハキ違チカヒ之咄シ

ぬけさりければ彌次しまつた京の物ハ油斷がならねへ。強勢よ請合て賣やァがつていま〳〵しい（トつぶやく向）（ディ〳〵）（是ハ大坂にてハ紙屑買。斯の如くディ〳〵）より紙屑買〳〵と呼あるくを彌次郎ハ江戸のかくで雪駄直しと思ひよびかけて（コレ〳〵此雪駄頼み奔紙屑買ハイコリヤ片足かいな。片足でハどうもならんわいな見りや其はねてじやも鼻緒が。どうやらろこねろふじや。一所よさんせ彌次ホンニこねつも今よぬけるハ。とてものこよ一所よしていくらた〳〵（ト云ひえ）是を買とる心よてひねくり廻し（コリヤいこ安いがえいかいな彌次ろうさ何でも安いが好の紙屑買）左樣なら四拾八文じやかどうじやいな彌次イヤ夫でハ高い〳〵廿四文斗でよかろふ紙屑買エ、じやら〳〵云てじや彌次ハテサ本とうに廿四文〳〵（トむしやうよ。はき物をつきつけるゆ）ふ紙屑買ハ一向よ合点ゆかす。うりての方から直段をねぎるハめづらしひとおかしさ半分。何よしてもそんのいかぬとなれば錢をとりだし（ハイ巻したら廿四文よまけて上て買ましよかいな（ト廿四文彌次郎よ渡し雪駄を）彌次まつた〳〵己よ錢をよこーて。其雪駄をどう爲のだ紙屑買ハテ買たのじやわいな彌次とんだとをいふ鼻緒がぬけたから直してくれろといふのだハ紙屑買イヤこなはんわしを。は

○渡邊崋山作
醫之屠
村

きもん直しじとや思ふてかいなコレ紙屑買い渡邊から出やせんぞへ。わたけたいなわろじやわい彌次イヤ此よこッたをしめが。なせろんならディ〳〵と云て歩行のだ（トりきみのゝるを）（左平治かしとゝめ）ハヽァきこへたコリヤお前が鹿相じや。わしや先刻にから昏つたとじやと思ふて居たが。アノお江戸じや。はさもの直しがディ〳〵と云ふて歩行きおるといふこつちやが。當地でい屑屋どのが皆ディ〳〵と云てあるくこと御存じなぬさかい御了簡違ひじやコレ屑屋さんこちが悪いゆるしなされ紙屑買じやてゝ。あんまりな。わろじやわいな。わんだらくさい北八ハァ間違じや其雪駄をけへしてくんな紙屑買いやじやわいの。こちをはきもの直しじやといゝくさつて。此方外聞が悪いわいの（トいらたつを北八左平治がやう〳〵と斷いふて雪駄を取かへー。夫より彌次郎はわら草履を求めてはき雪駄は嚊よ狹て天神橋を南へ打渡りて。よこ堀迚をたどり行に。爰よ人立さいがしく喧嘩と見へ口〳〵よわめきのこしりて打合〳〵往來。いやが上にかさなり騷動するに。彌次郎北八も人に押れて。もきぬけんとしたるが何か紙よ包たる物。足元よ落てあるゆへ。彌次郎何心なく拾ひとり開き見れば

【図 八十八番】

かくの如く書たる札也。今はたへて其を

なゝとい へ共。此時分ハ。座摩の宮に富の有し時分よて。往來の人此摩集におされて取落したると見へたり。はるかよ爰を行過て左平治（モシ今あなたの

お拾ひなされたのは富の札じやないかいな彌次ろうだろふコレ八十八番とありやす左平コリヤ座摩の宮の札じや。然も今日突日じやわいな。大方今頃ば。もふ突てしまふた。じやろぞいな彌次ろうさどうせおとす位のものだ者をからッぽの札であろふ。へちまよもならねへ（ト其まゝひねつて打やるを。北八跡よりちやつと拾ひて懷中し。ゆくやどよ。やがてかの座摩の社よ至りけるが。今日はくわんけ富の當日殊よ今突仕舞たると見へて。摩集下向おびたゝしく押もなしなから行を聞ば（ァゝ殘念なとしたわいな。あの八十八番すでのことにわさが買ふ所じや有たわいの。あれ買そまなふたは。こちの運の來らんのじや。買ふたら第一番で金百両取。おつたものをけたいが悪い（ト咄ながら行と彌次郎（聞つけてきよつとして（北八きいたか今の札を打ちやらなんだら。よかつた

物エゝどうしよふ跡へ戻つてをふ有るめへか　北八ナニ今迄あるものか　彌次エゝ〳〵殘りおろひををした（トおとふりかへり〳〵神前よ至り見るに。富はつきしまつて第一番より段々と當り札の番附一々記て正面に。はりつけあるを見れい。一の富八十八番とふでぶとにかきたりける。彌次郎あまりのをよあきれはて（ヱゝいめへましい。おらァもふいつその事坊主よでもなりてへ。とても運の開ける時節いねへ　北八（ハハ、ハハ）ろんなに力を落すめへ。已が百兩とるからおまへにも三兩や五兩は借して遣る。コレ見なせへ（ト彼の拾ひし札を出し）彌次ヤァ〳〵。手前拾つて來たか。出かした〳〵。こつちへよこせ。　北八イヤろういなるめへ。おまへの拾たものを。跡からちやつと拾つて來たからコリヤアおらよさづかつたのだ　彌次イヤ〳〵ひつぎやう已が先へみつけて。拾つたりやころ。又手前の手へも。這入たと云ものだから。元いおゐらが物だ　北八夫でもお前一旦拾たじやァねへか　彌次ハテろふいはずとマァよこせ（ト無理よ引とろふとする。北八いかな遣まいとせりあふを。左平治止て）コレ〳〵靜になされ。ろなゐに云たら。ひよつと拾た主がきゝつけて。出まへ者でもなゐさかい。何じやあろとわしが挨拶じや。半分宛分なされ。ろゐてわしよもちと

○彌次蘇生

ハれくれじやあろな北八ソリヤアおゐらが承知の助だ。何よしろせんい急ぎだ。金は何所で受取のだろふ左平ソリヤあこの世話人のゐる所で渡ゐおり升わいな北八そんならそけへ行て見やう（ト打連て其所へ行て見ればかくの如く下げ札ゐて有り）けるゆゑ拠い今日のをにはいかずとまづ神前よ參りて御神の利生格別ありがたや

罰よはわらで當る富札

（斯詠じて大きよ勇みたち社内殘らず順はいして表のこのたよたち出て）北八ナントヽ北内拾た奴が金請取に行はせまいか　左平ソリヤ氣遣ひなゐわいの。いたとて札と引替にせよや。渡さんさかい。何程當人でも無證據じやわいの

口上
當日殊之外混雜仕候よ付
當り札之御方明日四ッ時
金子御渡可申候以上
月日　　世話人

彌次奇妙〳〵強敵よ面白くなつたわへ　北八あしたい百兩久し振の對面　彌次ヱゝ久し振もおかしひついそ有たこともなくてハ、（ト勇み喜びやがてかしこの茶屋よはねりてまずまへ祝と酒汲かはしぬ）斯て彌次郎兵衛北八は。思ひもよらず。百兩の富よ當りたちまちいきほひを得て。座

摩の社地を出しより。煮賣茶屋に入て酒汲替へし。ほろ酔機嫌となり心面白げようかれたつて案内者の佐平治よ引れ難波御堂の穴門より御境内を順拜しながら

おふみ様と聞ば女の名にも似て。あらありがたの穴賢也

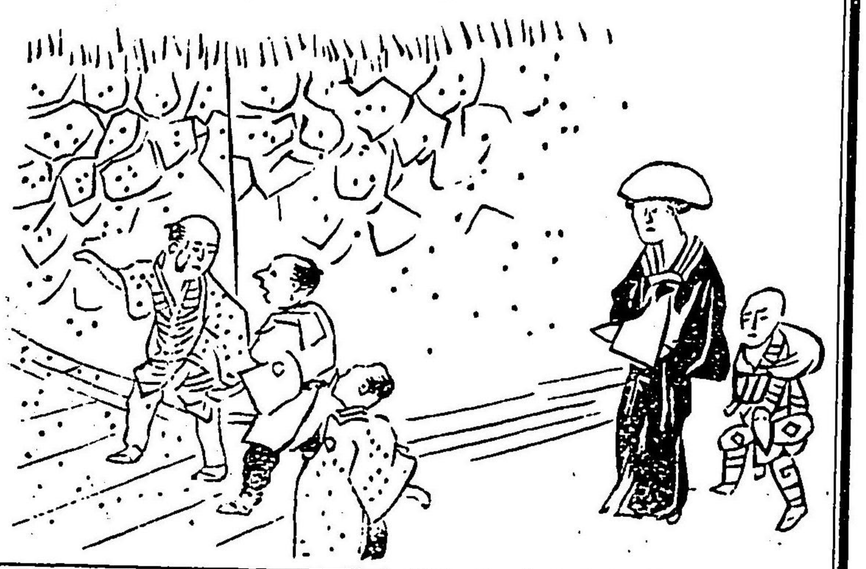
夫より仁徳天皇の社よ參る。是い世俗よ博勞の稲荷といふ（博勞稲荷は別よ境内よ見へたり）

博勞の稲荷といふも道理や。給馬賣てくふ見せも見ゆれば

（門前の田）おはぬりな〳〵田樂の慌たてあがらんかいな北八エ、しれたををいふ田樂のさめたのがいけるものか（芝居の）（木戸）サア今が盛衰記無間の鍾じや評判で〳〵彌次無間の鍾もすさまじい。こつちは百兩取てゐるハ途方もねへ。コウ北八ナント是から新町とやらへ女郎買よやらかしはどうだ北八面白へ直よ行ふかノウ佐平さん左平ソリヤお出なさるいゑいが。無躾ながらお前さん方の其なりじや。とつくもふ。わかんじやなゐかゐな。ソリや局女郎などお買なさりゐ。格別見せ附じやてゝ。ちと身なりあんじやうして明日の夜さりなとお出なされ彌次コリヤなる程お前の。いふとほり

○夢中之夢

たハテ百兩といふ金が取るものを迎も買なら其太夫とやらを買て見る。こゝろ。いきだ北八チヤもふくらへろばにてきたの左平次ソリヤ其筈のことといのわしお供ーて九軒の揚屋何所へなとお連ヤろ時よ是か太丸屋ナント云ら引者じやあろがな（呉服店）（大丸屋）あなた是へ〳〵何で御座いお這入な〳〵〳〵彌次ナント北八爰へ今着物を誂へて行ふじやアねへか左平次ハゝお前さんもまんがちな。明日のをよなされませいな北八そふさ今よやヤかぎらねへサア〳〵あよびなせへ彌次ろんなら明日のをよしよふ。北八。手前へい



何にするつもりだ北八着物のとか。されはの結城のぐつといきな縞で三枚斗り羽織い龍門のごり〳〵する奴の芥子あられ何ぞか金持らしくて。能かろふじやァねへか

彌次イヤ〳〵夫でい店者めく。なんな着物着たらコレお前夕べは何ば出た。ヨの字か。キの字か。こりやホ久の代物で。位出たさかいゑらひ徳した抔と。符帖で洒落ようといふ風だから。おさまらねへ。おゐらはしま縮揃ょ黒羽織お太刀萱本鳥渡きめの判官盛久い妙であろふ。但しはぐつと大ふげさょ緋鹿の子のへり取無垢。上に結城の棒ぎょ對の羽織い。あんまりきいた風であらふか。八丈も野夫ょなつた。唐機は親父めく。南部縞はもふ湯屋に脱ぐ有様ょ成たからおろれる〳〵北八ろふさ。なるほど着様と云とまさか着る物もねへもんだ（ト夢中ょ成て咄し）着る物がなかァやつぱり其後ろお大きな紋所のある幟の染返ーを着て居さんすがゑひわいのハ、北八イやこねつらァ何ぬかしやァがる後の人お前のこつちやあねわねの（トいちもくさんょょげてゆく）

北八ニ、いめへまきい奴らだ。今ょ見ろ翌日いどんなもの着と思やァがる左平治ハ

、、コリヤ無きつけ乍お前方がろなねお。ろゆんだなりして縮緬じやの。羽二重じやのと云てじやさかい笑ひくさるのじやが。コリヤ敵等が尤もじやわねなハ、時ょ是から阿彌陀池へ參じて砂場の和泉屋お目ょかけたいな彌次イヤ宮寺もあきいてた夫よりか早く新町へいきてへものだが翌日の晩までい强敵にまち遠な左平治さよならの云致そかいな。わし何なと損料の着りもの借て上るさかい夫着て今宵新町へお山なされお金い跡でもだんなね。わしか親方のきつてじや。揚屋へ行くさかいどして翌日い百兩お取なさるのじやもの。何じやあろと。ろふしなされ北八コリヤ面白へ理屈だ彌次いか様ァ。そんなら直ょ歸つてお前ょ其さんだんを。して貰ひやせう（ト浮頂天になり。心齋橋筋を南へ早くも道頓堀ょ至りければまことょ當地第一の繁昌の場ょして前ょ嶋の内あり後ろょ坂町あり。おやま藝子のなまめき行違ふ様賑やか也）

いつとても調子くるいじ三味線の。道頓堀の賑ひいそも

北日もはや七ッ下り大西の芝居打出して櫓太鼓の音かしましく。評判じや〳〵の聲。木戸口ょ溢れて見物をどよみつれ押合ひ中を漸やくすりぬけ〳〵ゆくまゝょ角の芝

○雨個之思應レシ欲ニ路之胥揚ヲ

居中の芝居の看版さへも目ゑ付ず角丸若太夫竹田の切り狂言も打ち出し前へいろは茶屋の仲居赤前垂と倶ゑ毛氈を引摺りて走り。嶋ヶ内の迎ひ駕。ハイ〳〵馬じや〳〵と連てもまれ行く程こそあれ此輩集大方ハ置すとも拾文の奈良茶屋へ這入り吸ハ大庄の蒲焼ゑ鼻いからーて入もあり。日本橋近くなりて漸く往來も。すきたりければ。頓て走り出して行まゝに早長町の宿に着たりける。左平治先ゑ立てサア〳〵お歸りじや〳〵宿の女共お早う御座り升〳〵アイ是ハ左平さん御苦勞時に今の損印の理屈ハどうだろふ左平治かしこまりました早いつきに。せいらくして。さんせうわいな北八そんなら早く〳〵ト二人ハ奥へ通ると女來りてゑ致しましよわいな彌次イヤ飯も喉へハ通らぬ。何だかゞハ〳〵して。然し湯へハ鳥渡いねつてこよふ北八おろくなる湯も能じやァねへか彌次イヤかほばゝのりあらつてくる北八おきやァがれハゝ〳〵ト此内彌次郎ハ湯ゑ入ゑもく暫して左平治損料物を風呂敷ゑ包て走り持來たりて〳〵お待かねで有たじやあろ〳〵ト包をとけはか北八れ是とひねくり廻し〳〵モシぶいき物斗だね左平治じやて〳〵是ゞ一ヲ能

の心やわいなお前ゑは此黒紬が能かろ〳〵北八何だ途方もねへ紋所だ。そして丈が。てんつるてんで袖はてへろうゑ大きい是を着たら無塩の奴紙鳶と云ものだろふ。そつちらのしまは何だ左平太織じやそふな北八イヤ此小紋が能かろふ〳〵ト引立て見れば女の着物〳〵左平ハゝわしや男の着り物かと思ふて取て來たわいな北八よし〳〵斯しよう小袖壹ッじや。志みつたれだから。此女小袖を下に着て上は太織縞と。きめやせう。〳〵ト二ッ重て着替。帶をゞて居る所へ彌次郎湯より上り來て〳〵チヤ左平さんはやいなエ〻北八めか着たい〳〵男振が能から何所へ出ても借着ゐたと。やつぱり見へる〳〵北八洒落ずと早く支度をしねへ彌次おらァこの黒い奴がよし〳〵

旦那と見へる様にお太刀一本こうさめて行ハ北八コレサ。お前着物を着ねへか。裸身ゑ其脇差を差て行くつもりか醫者様が清盛様の胍を見ゑ行きやァしめへしとんだあはてやうだ彌次時ゑ羽織ハ左平お前様ハ此ぬき紋ゑしなされ北八けちな羽織だ干鰯の仕切ゑ行ふといふなりだ彌次人のををいふ手前の風ハ帮木寸伯様の代胍ゑ來たといふ風俗ハヽァ左平お支度がよう御座り舛ならさんぜうわいな北八ヲヤおねらハまだ湯へもいらなんだ彌次馬鹿ァいはずとサァ〳〵出掛やう〜ト打連て爰をたち左平ゑ當りしにつけ込何でも割前をせしめんとて無茶やうゑおひやりちら〜次ハふたりが百兩の富かし此宿の番頭へ吹込み新町揚屋への手紙を貰ひて打連此所を出かけ〜斯て三人ハ足も空ゑ長町を北へ堺筋真直ゑ行ハ早くも順慶町ゑ至りける。名にしあふ此所ハ夜見せ繁昌の町筋ゑて兩側ゑ内見せ出見せ。尺地もなく万燈をてらし。呉服屋道具屋袋物櫛笄玳瑁珊瑚馬瑙の類あるゝと思へは其隣ゑハ盥小桶飯櫃摺子木杓子なんど或ひハ神棚もとめて代錢を拂ひ清めて行あれば。佛像買ふて尻くらひ。觀音と不足錢あたへて走るもあり傘の買ふ人に下駄をはくあれば。草履の買ふ人にわらじはくあり。

兩替屋ハ目を皿ゑして。天秤を打ならし。金物屋ハ口を剃刀ゑひとまく切物を商ひ有屋。代物ハ腐たれども寶聲はねて呼立るを聞けハヤァ大きな鯨じやァ〳〵鱶じやァ〳〵車やァ〳〵鰶やァはつのみの切賣やァ〳〵〜薩摩芋賣〜ほつこり〳〵ぬくぬのあがらんかいなヤァほつこりじやァ〳〵〜上かんや〜ぬくぬ〳〵鯤の焚たのあんばいよしヤァ負た〳〵まんまいの煎殼ゝやァ〳〵鮓賣御評判のちくら鮓。鯖か〳〵鳥貝ヤァ〳〵北八アレ彌次さん。見なせへァノ鮓ハ京で喰たが。とんだよかつた。一ッやらかそふ。夕飯をくはねへで腹がへつた彌次ホンニろうだ。モシ是ハいくらだね鮓屋ハイそっちやが四文こっちやが六文じやわいな彌次チットよし〳〵コウそんなにやみと取て喰な又長町で菓子を喰たやうな目にあふせ若爰へ貳拾貳文斗りが包んでくんな〜ト錢を拂ば鮓屋竹の皮ゑ包て〜北八コレ己ゑもよこしねへ彌次跡で竹の皮をやろふ〜ト出すを彌次郎とつて道々喰ふ〜北八ニ、虫の能こっちへ〜ト取に掛る彌次郎やるまねとする所ゑ〜彌次アイタヽヽ〜ト下から犬かひよいと飛つき引たくる北八どうした彌次さん彌次いめへましい畜生めゑしてやられた犬ゑん〳〵彌次エヽ

こゐつめが（ト足でけると犬へよげる。追ひ掛ける）彌次ア、痛ひ〳〵コリヤとんだはづみよ井戸がはへ又ぐわつりと所へ井戸を出して置やアがる四ッ辻のまん中よ左平コリヤ井戸の辻と云どころじやわいな北八いゝきみだ已よ喰はせねへむくひだい

ひとつ下されと犬めが鳥貝へ。偖も好きび團子ならねど

夫よりも往來を押わけ行先よ網笠深く打かふりたる（ト笠者の口から出次第サア〳〵御遠慮へなね。お出なされ當卦本卦。墨色の考へ濃いか薄いを。當るが奇妙。うせ物へ存せず預り物へ仕つらず待人へ來るか來んの二ッ。當るも八卦當らぬも八卦。どつちやでも見料へ十六銅宛ヤ受ける是ばかりへ違ひへ御座らぬサア〳〵これへ〳〵

彌次ナント北八おゐらが翌日百兩取ことしれるか。しれぬへか何もなぐさみ見て貰ふか北八コリヤ面白へ彌次モシわつちが運を見てくんせせへ（ト十六文出せば。トなひ者。彌次郎の顔を横目に見ながら目ど木を取。）ハヽア是へお前。途ひやうもなゐゑらひ仕合なとが出け算木を並べしばらく考へ（ト考そじやあろぞいな。卦へ坤の卦坤るわいな彌次左樣さ大きよ心當りがありやす

○趨中揮ノ紐稍ヤ欲レス解ント

なこんくわい。俗よヤす狐則へち狐福とヤて殊よ降てわいた樣なさいへひが來ると見へ舛北八コリヤ奇妙能く當りやした占考然し變卦へ乾の卦。乾な。乾卦れつの。象り本卦の坤と。變卦の乾と合して是を考ふる時へ。易よ曰。乾坤二ッのあひだをぬけ離の卦に當つて中絶たり。偖へ玉なき殼鉄炮とヤてと御座れゞ万事にお心を附らるゝがよう御座り升彌次こゐつへ。すこたん〳〵。ろういつわけじやアねへ。もふ此方の手へよぎつたも同前だものを延喜の惡い占考イヤろこで當るも八卦當らぬも八卦北八もふよしなせへ十六文たゝすてた（ト小言いひなから爰を打過ゆく程にはや新町橋を打渡りてひやうたん町に至りける）扨此曲輪へ寛永年中よ初めて御免許あり田圃を開きて新さに町を建たりしより新町と呼ひて廓わの惣名となせりとぞ。

昔しより今よいたるまで繁昌いふはかりなく。兩側の六字見世賣物よ花を飾り。きらびやかゐ並ひたるを壹軒〳〵に差覗きつゝ。夫より阿波座越後町を見物し局女郎の袖引を罵しり興ゑて行まゝよ頓てれ軒町に至れば佐平セシ〳〵袋が皆揚屋じやわいな北八なる程御てへそふな家体骨　左平サア〳〵袋じや〳〵お前方はそこよおぬでなされ（ト二人を玄關よ。待せ置て。左平治ひとり住半の勝手口へ這入かくと云入れける。此處ハ長町の河内屋より折ふし客を送りおす内なれば左平治手紙を持來りて渡しけるゆゑ。亭主）コレハ能ふお出下さりましたコリヤ〳〵仲居ども御早速羽織袴よて向に。出來たり（案内中さんかい。サアお通りなされませ彌次そんならもるしなせへ。コウ北八來ねへか門口よ立たちだかつて花屋の柳じやア有めへし左平コリヤ出けましたハゝサアお出（ト玄關より。上りいく間も〳〵越て行程よ。奥座敷の花やかなる所よ。案内する盆を持出（と。左平治ハわさとふたりを大盡風よもてなし遙か末座よ居る仲居ども茶烟草る内亭主（亭主めで御座り升。御ひねきよ能ふころありかたふ御座り升彌次御亭主さんか。わつちらア。今度江戸から仕入ゐ登りやしたか御當地い初めてゝ御座りやす逗留れ内いどふせ。度々參りやせうからお頼みアやす其脊りわつちらア鳥渡來ても北

した金つかふことといきらひだからむたつかひの一箱と二タ箱ハ別よ爲脊よ振てよとして有るゐら其所ゑ一向来練なしさ。然し性得が商人といふものだから。はじめつからろふいいきやせねよよつて。マア今宵ハお前の方でも。隨分安わがりにまけてくんなせへ。ハテ跡の爲だからノウ左平治さん　左平　左樣〳〵斯致しましよ。夜前お着なされておくたびれでもわろさかい。マア今宵ハ太夫さん方借て御らふじて。御酒一ッ上がつてお歸りなさるがよう御座りましよ。ハテ又翌日の夜さりなとお供致しましよかい（トこゝよて左平治ふと心附。今宵金をつゝのはせた所が。ひよつと明日の百両どういふをよて間違ふまゐ者てもなし。手に入らぬ引い不定なりと。順慶町のうらなゐしやか言ば思ひ合せて安心ならね共。いまさら此ゑ（彌次まよも歸られず。鳥渡一盃呑せて連て帰るもくさんゆゑかくハ云と見へたり）何れともよろしく〳〵　左平　そしたら仲居衆。太夫さん方マア借りにやらんせ　仲居ハイ畏ました（トたつてもく此内酒肴いて仲居ども相手よ呑かけてゐると。隣座敷よハに酒落ちらすを襖のこなたより（三筋程ある薄髪の天窓やがて主坊よ鳴鐘ならバ　權そつとのぞき見れば藝子の唄　八がよかろふけんれど。是から貞月と云ておくれの神掛て願ひたてまつる（チツン シヤン

○彌次北而會下登ニ此ノ樓ニ好造化上ニ是レ則チ地ノ卦

太皷持　イヨ〳〵お島さんツリヤ南の權八
物八　めが摺物の唄じやゐ藝子さよじやわいな東南さんの手を附てじや有たわいな客コリヤ〳〵我どもが是からお國踊りども踊てのサア三味引出てたもれ（ト此内客人立て手ぬぐひをかふり両の耳を出し羽織を横ちよゐ肩先を出しかけちんぢばしよりして手ゐ扇を持つとげい子が三味せん）（トヨチテン〳〵客唄コリヨ合コリヨ合コリ〳〵〳〵もちこいかソコヨッチヨン三味トチチテン〳〵女ず山山龜女いず山の山の古孤龜女しりよふれ。かんべまくれちやちよれちや　コリヨ合コリヨ合コリ〳〵〳〵持こいかコリヤ春戸ゐや小屋持龜

女がばん。ろくばつたのゴうからず。ぼうぶら枕ゐ。へこ解ひて。そこぬいて、ぬいずりさるき。是まこ能こと仕てのけたッコヨッチヨンチトチテン〳〵皆々ヤンヤ出けました客草臥ァ〳〵だりがてい〳〵こんがい此様酔ひ喰ひおつて。わゐどもの。しやんす目にがちりうばあてや。おところし〳〵藝子相方チホ、、何云なますやら。こちやゐからよめんわいな客なじかい〳〵げい子ヲ、すかんやの。アノお顔見なませ。ろらひ大きな目同白眼してひかる様ゐゐらんでじやわいな客イヤ此奴ふとうな奴の。わいどもの頬よりお身の頬何んじや鯲どうどものよこさるきせるやうな佛てふ頬して面白ふゐゐぞ。我出行横ども。最早づらんばい。づるぞ〳〵（トもつての外むか腹立て立上るを仲居共引とめ）コレイナア。お前さんそなゐゐ何でお腹立な舛ぞいな（太皷持コリヤしま主が無調法ナントこう致しましよかいな。どうやらお座敷かしゆんで來たさかい。是からわつさりと額風呂へなりこみの。例のッカ〳〵ッツ、カホカ〳〵。結搆結搆なぞい。どで御座り舛ぞいな客何じや額風呂と云い殻風呂のことじやな此奴わいどもを。野呂間じやと思ひふるか。客共ゐ

○武士逢二土砂一身即チ柔ニヤリ弱

過言

向ひてあんがい。おろよいことぬかいて能かばい者か。づくわうとも。よやいてくれるぞ〳〵ト此客人腹立上戸と見へて。むしやうよおこりちらし。皆々留るをつきのけ〳〵せひ歸ろふとおほもめの最中。相方の太夫引船かむろを連て爰へ來る〳〵仲居ソレ〳〵太夫さが來るましたわいな太夫チヽ、ちんどお前さん何じやいな中居今お歸りなまを迎。ゑらふお腹立てじやわいな太夫お前さんもマアこちや洲濱の内方よ出てじやさかい。ちとの間待て。おくれなませと云てお越したじやなかゝいな。夫よ今お歸りなますとい何のおつちやいな。夫程こちが。おねやなら。サアお歸りなませ〳〵客イヤ我いども夫で出ると云ていなかいゞ。たんだ此廓ども。脚ふりよづらんばいと。云おつたのじや。もう能のばい〳〵引船能ふ世話やかまてじや。サアあつちやへお出なませ〳〵ト大勢に引立られ。かしての座敷よ行。

天窓打

○越中褌ノ紐殆ト危シ

偖おなたにハ太夫十人斗り次の間よ語かけひかへ居ると。銚子盃を別に持出仲居帳面と硯箱をひかへて仲居扇屋の折琴さん是へおかし〳〵ト呼出せハ折琴太夫。座敷ゑ出盃をとり呑まねして仲居下に置き。仲居の顔ゑ見てにつこりと笑ひ立て行く〳〵ト此内だん〳〵と太夫ひとり〳〵よ出。初めの如く皆〳〵盃をとり呑まねへおかし〳〵ト此内だん〳〵と太夫ひとり〳〵よ出。初めの如く皆〳〵盃をとり呑まねして行。彌次郎北八ハ是を珍らしき事に覺へ。こゝよも様々むだあれども署〳〵仲居どなたぞお氣よ入なましたかいな北八イヤもう殘らず氣よ入た。其内三番目に出たハ何んといふ女郎だの〳〵仲居帳面〳〵ハイ西の扉屋の東路さんじやわいな左平ヤア今宵ハ御見物のみのこりちやさかい。翌日の夜さりなと。おゆるりとお遊びなさるよふ御座りましよナセ今夜でも能じやアねへか左平ハテまアわし次第よてし置なされ〳〵彌次郎もくさん違ひてふしやうふしやうとする〳〵ろんなら酒でもさらふくやらかしやせう仲居げい子さんハへ左平イヤ夫も忝ひわいの。お急ぎじやさかい北八こけへきて酒斗りじやアあまらぬへ何ぞ呼よやア。こゝの内へ氣の毒じやアねへか仲居何のまわサアお一つれ上りなませ。ホンニお羽織お取なませんかいな〳〵ト仲居共二三人たちかゝり彌次郎北八よ羽織をぬかせてたゝみなかふ。羽織の裏に印しあるを見附てくつ〳〵笑ひ出し仲居いさ〳〵コレ見いな十文字の糸縫が有ヲい

な。大方損料の着物を借てお出だのじやあろ（ト仲居共ちいさな聲にてさゝやき笑ふ。すべて長町損料屋にてい着物羽織共裏にい白糸よて十文字の印を附置と見へたり。おり〳〵長町泊りの旅人。是を借着して新町などへ行をあれば。此廓の者共みな兼て承知して居るともへかくれさゝやき笑ふと見へたり。左平治い是を聞つけ心の内よ　彌次　ナント女中衆此の廓中よ太夫おかしく思ひおれども彌次郎北八い露しらず　北八　わつちらが逗留の内ぞいくたりほどある。皆惣揚にして遊んだら面白かろふ　彌次　ふゞみんなよ。揃ひの仕着せでも殘して行てへ者だノウ彌次さん　仲居　ソリヤおうれしふお舛わいなソノきりもんの裏よ十文字の印附てかいな（今一人の仲居）コレイナろないなをいわんすな（ト袖ひいて笑へ共ふ）北八　ナニ裏よ十文字とい何か當りれあることたりい一向しらす　たな。畜生めがなる程お前なぞいいろがあろふ強敵よ仇者だ。ヤレお酒盃頂きやせう仲居　チホ、、。ゑらひ油云ひな舛さよなら十の字のお方へあぎよわいな　北八　ナニ十の字とえ已がをかコリヤ有難へ（ト舛をのれがあそへれるとといしらす。盃を取わけると仲居銚子を取て汲とき。北八此仲居の膝をちよい（仲居　チ、痛（トとびのく拍子に盃に障り北八の膝の上に）仲居　チ、せうし。とつめる）ばつたり落るとろこら中酒だらけよなる）お氣の毒なを致たわいな（今一人の仲居）めつそうな氣を附さんしたが能わいな。あなた玄

○親父有二分別一

み〳〵してお惡かろ。そして酒のかゝつたのい。きはづくものじや。ちやつと。く、みず水でなと洗ふてあけさんせ　仲居　ホンニざつとなと。洗ふてさんじやう。おぬぎなませ（トたちのゝりぬがそふとする。北八い下よ女の着物を着て居るゆゑ上着をぬいていかくこうわるしと仲居を。はねのけし〳〵。コリヤほんの。ふだん着た仲居　ハテ御遠慮はおませんいいな。おぬぎなませ〳〵（ト此仲居共ふたり北八の着物。是も裏よ十の字の印わるか見てやらんと思ひうなづき合ふて無理よふたりして帶を解きかゝる北八肝をつぶし）コリサ〳〵能といふよ彌次　ハテコリヤ。北八ゑて吉じやしみが附ていなソレ。鳥渡そこのとこ斗りゆすいでもらふが能わなハテ火鉢でなりと。あぶれはじきよひることと（ト損印ゆゑあとでやかましかろふと。目顔でしらせて北八よぬげとおしゆる。北八は大きにこまりはて）エ、何のちつとばかり酒のしみたくらぬ彌次　ハテさてちつとでも跡がきはづゐちやア。ソレ惡いじやアねへか。仲居　飛たいぎなから。ざつと撮み洗ひしてやつてくんな仲居　ハイ〳〵サア〳〵おぬぎなませ北八　ハテさて情ないをいふもふ能といふに（ト色〳〵。いひまぎらかして。ぬぐまひとすれ共。とう〳〵二人りして帶をとき。無理よぬかせた所。が下にい女の着物を着て居る。袖ちぬさくゆき短い所をかくさんと北八兩手を縮めてしり込する。彌次郎ふしぎそふに）チヤ

〳〵手前何んだ女の着物を。着て居るか　北八　エヽとんだことをいふもふ〳〵一ッ肌だら寒くてならねへ（ト だん〳〵後ろの方へ縮まる）左平　お寒かろ一ッ上りなされ　北八　彌次さん其酒盃を取てくんな　彌次　ナぜ〳〵手前手を延すことといならねへか其所ゑあるとりやな　北八　いま〳〵しいお前迄が。私わらを。へこませる（ト此内仲居。かの酒のかゝりし着物を洗ひ火ゑほしし。ほし上りたるを持来たり）サア〳〵十の字がよう御座り舛わいなヲホヽヽ。こちやいやいな。あなゝの其容い何でお升ぞいなチホヽホヽ（ト むせうに笑へば）北八むつとして　コリヤ。うぬらは先刻ゑから已がだまつて居りやア。十の字だの何のと。おゐらゑ符帖を附て慰みものゑしやアがるが。何でおゐらが十の字だ。それをぬかせ〳〵（ト何かなわたりまなこにね）ッイてんがうに云たのじやさかい。お氣よあたりなましたら堪忍しておくれなませ。北八　イヤおくれな舛めへ。何でも其十の字のわけを聞ねへ内い。了簡ならねへい　左平　ハテゑいわいな。ろなねにお前腹立てじやといんまの先のお侍らひの様に無粋じやぞへ〳〵　北八　ハテ主のしつたことじやアねへ。無粋でも山水でもとんちやくいねへ。サ

アふんはりめら十の字たア何のこつたぬかせ〳〵（ト わめきちらすを。彌次郎左平治ゑ合點せず。せひ〳〵十の字のわけを聞ねば了簡ならぬとのこと色〳〵ゑ留ても。酒機嫌ゑて一向とも忘左平治もまちめんだうゑあり此上いせんかたなしとて）コレ〳〵仲居衆あなゐゑ私つしやるものを。ろゝことがない。十の字のこと。いハんしさがゑいわいの。仲居　ろじやて、。それかまア　北八　早くぬかせ　仲居　いふたら又お腹立。おますじやわろ　彌次　腹ア立ても。わつちが呑込で居るから。念晴ゑゑ云て仕舞ひなせへおゐらもどうか聞てへやうだの仲居さよなら云てのけるぞへ。アノナ十の字とい是じやわいな（ト ふたりのぬぎおきたる羽織の裏をひつくりかへし見せる）彌次　チヤ〳〵何んで。此羽織ゑ十文字か縫附てある　左平　ハヽヽヽコリヤもうとつとゐから。役体じや。ハテ旅のお方〳〵ゑやもの。そゐねゑ着物用意して。お出るお方斗りもなゐもんじやさかい。夫で損料借て。お出た ゑやわいの　北八　ナニおゐらが損料の着物着てくるものの。とんだことをいふ　左平　イヤもうそなゐにいいんしてもあかんわいな。長町の損料屋のきりもんゑい皆十九ドの印しつけて有と。敵等能ふゑつてじやさかい。夫でゐなゐゑ云さのじやわいな（ト十の字のわけさ

○一宵千秋と思ふ

らりとわかりて。ふたりにいゝよ大へこてみとなり。北八なまなかけことといひつけり。今さらはぢれういぬりし。くうよ〳〵思ふ内にもおかしくなり。さう〳〵支度してたろ〳〵と。こゝをでかけるよそりやお歸り玄やと。仲居ども大勢い〳〵目引袖引笑ひをかくして。送り出るよゞ。三人やがて表よ立いで〳〵

損料の着物のみかゝ太夫まで。借てみたりの不首尾たら〳〵

十の字の印しありとゝ露知ず。借しはをりのうらめしきかな

斯打興玄つゝ。長町さして急ぎける。斯てみたりゝ新町の遊よ思ひもよらず面目をうしなゐしも。道すがら笑ひの種と成て打興じつゝ廓を出たりしゝ。最早子の刻過ける也。順慶町の夜見世もひけて往來淋しければ各〳〵足を早めて長町よ立ち歸り。翌日こそゝかの百兩よあたゝまり。今宵の恥辱をすゝがんと胸工みして。河内屋の奥座敷よ臥たりけるが。何となく心ろさえて寐入もやらず。漸やく一番鷄の唄ふ頃。ところ〳〵とまどろみたるが。早くも夜明てこゝよ泊り合わせし旅人は追々起きいで。咄し聲するも彌次郎兵衛北八も目覺て床を出れば。左平治目をこすりながら出て來たり早とく〳〵とすゝめたるよゞ。ふたりゝ食事もろこ〳〵よ支度調のへ。昨夜の損料

着物引ッ張り立出て急ぎゝせ行まゝに。頓てかの座摩の宮なる富會所よゞ至りける北八急ぎゝ程ふも是だ〳〵サァ彌次さん這入らぬいか彌次手前先へはいれ北八へゝどうやらはづかしいやうだハゝ。モシちとふ頼み申やす。わつちらァ昨日の一の富よ當りやした金子をお渡し下さりませ〳〵トいひいれると世話役講中と連たち見へたるが壹人羽織袴にて早出來り〳〵ユレハ能こそ。サァ〳〵こつちやへお通りなされ〳〵ト玄關へ上てしばらく〳〵またせやがて又出來り〳〵金子お渡しヤまゐよマアあつちやの方へ御案内致しましよ〳〵トうちつれてくつと〳〵奥の廿疊斗の座敷へ

通す。三人こゝよすゐりて見廻すよ。琉球表を毛抜合せよ引つめ。床の間。違ひ棚の掛り。きらびやかよちり一ッなき座敷の。けつこういふはかまなし。此内十三四戈斗りの。うつくしき若衆が黒紬よ黄縁ちやうの袴にて茶烟草盆運ひ。次よ吸物硯蓋銚子盃持出ると講中一人（只今金子お渡しヤまゝよ。先御酒一獻召上りませ　彌次　コレハ〳〵御叮寧なハヽヽ　北八　ナニ夫かおかしひてとこのお辞義なしにはじめなせい　講中　ま事ハ早此多數の札數の内よて一の富よお當りなさるといふハ御運の開ける端相わたくしなどもあなた方よあやかる樣よ。お盃いさゝきましよのいな　彌次　左樣ならばかりながら　講中　イヤ先あなたへ　北八　コレハ御馳走て御座りやすチトヽヽ（ト下地ハすきなりざよねハよし。むしやうよさいつおさいつ呑て居る内。有色々出。世話役中替り〳〵あいさつに來り。つかせうたら〳〵そやし立て酒の相手と也。大方に生酔となりたるころ御時分ご御座りましよ。亀末の出來合差上ましよかいな（ト酒を引て本膳をすゑる）　北八　コレハ色々御念の入たとた　彌次　そうお構なさいやすなハヽヽイヤモ。面白くてこたへられぬへ（ト三人とも思ふ樣にくひ仕舞とやかて膳も講中二三人附そひ南瘝よて百兩三寶よつみあけたるを二タわけよして目八分よ持出て二人の前よおく彌次郎北八是を見るよりぞく〳〵して。うてうてんと也。よと〳〵者よてひかへて（さて各々方にハ初めて御意得舛。拙者神職の名代で御座り升先ハ御居ると神主

悦ビヤ入ましよお目出度とで御座り升彌次　ハイ〳〵　講中　金子お渡し申ましよ　北八　ハイ〳〵〳〵（講中　時よお願ひが御坐り升。當社御覽の通り大破よ附まして。再建の爲興行致ゐた富よ御座りますれバ。お當りなされたお方へハ何樣へもお願ひ申して百兩の内十兩寄進にお付申てお貰ひヤ升さのい。あなた方左樣なされて下さりませ　彌次　ハイ〳〵〳〵（講中　まだ外よお願ひでござり升わいな。是もすべて左樣よ致し升。金子五兩世話役どもへ御祝義と致して。お貰ひ申たふ御座り升　北八　ハイ〳〵〳〵（講中　まだ一ッ御座り升わいな。今五兩跡札をお買なされて下さりませ　彌次　ハイ〳〵〳〵講中　さよなら百兩の内廿兩引ましてお渡ゐヤますさかい。夫で能御座り升かいな　彌次　次　ハイ〳〵どうなりとを宜敷なされて下さりませ　講中　左樣なら其札を是へお出ゐなされ。引替よ金子お渡しヤましよ　北八　ハイ〳〵是よ御座りやす（トくだんの札懐中よ中手よ取見て（トモシ札ハ是斗かいな　北八　ハイ夫ばかりさ　講中　コリヤ違ふたわいな。北びつくりし八ナニ違つたとハへ。アノ一の富ハ八十八番ドや御坐りやせんか　講中　さよじや。八十

○越中輝シ遂ニ外レリ矣

○是乾ノ卦

八番じやわいな北八ろんなら何が違ひやした講中コノ十二支が違ふたわいな。當社の札よい皆番附の上よコレ見やんせ十二支が附て有るわいな一の富い子の八拾八番。こなさん方の持てでんしたのい。玄の八拾八番じやわいな（トいへいまゝの札は。すべて十二支をかゝふよ附て有ゆゑ。同し番數の札十二枚宛あるゆゑなり。北八是をしらぬ。うつかりとしてろこに心附かざれば。此まちがひできたるなり。両人是を聞よりはつと思ひぐんよやりとなげ（彌次エヽそんなら三文よもなりやせんの彌次さんコリヤどうしたもの。くひして

だろふ彌次アヽ〳〵どうといつたら。ねつのらさつばり方が落ておねらアもふどうも北八エヽ何だお前泣か業晒しな講中コリヤこなさん等は能ふ札を改ためてでんしたがゑいわいの。ゑらひあゑな乘じやわいの神主いこ役体じや。とつとゝ出ていなしやれ講中サア〳〵いんだ〳〵彌次ハイ〳〵コリヤ思ひ掛もなね御馳走よなりやした。何ゑら十二支位ハ間違つても能ふ御坐りやすから。どうぞ今の金子を講中あほな事ぬかしやアがれ。こゝなゑらず目が北八イヤものゝ間違といふ事はおりうちた。ろんなよやすくいやアがるこたアねへぞ講中たわ事云ふとどづき倒すぞ左平コレイナ。もふゑいわいの。こちが悪るいハテこなねよ御馳走にあふて。氣の毒じや。さかいしよことがないサア〳〵こち來なされ。是いしたり彌次さんどしたもんじやぞいサア立なされ〳〵彌次アヽコレ〳〵北八已が後を抱てくれ左平何んじやいな。お前腰がぬけたかいの彌次はつと思つたせいかして。どうも腰がのされぬアイタヽヽヽ北八エヽいくじのねへとだサアたちねへな彌次コレサ北様よひつはるゑあア痛い〳〵（トたちあがりしが。ひよろ〳〵としてあるかれず。せんかたなくて。四ツバひよ玄關までやう〳〵とはねいづれば。ろろいの看版きたる棒つきの男其口々よ）ゑらひあんたらじやな。敵等い大方あなゑなと云ふて酒呑よかな。うせおつた者じやあろぞい。畫盗賊めがやばなをさらすな北八なんだ。いめへまゑひ。奴らだ横面ら張り飛すぞ棒つきアヽいしこやの。どや

○彌次生意盡ケリ矣

いてこませやい（ト皆々たちかゝるを佐平治。中ゑ入おしなだめて）サア忌いわいの。こちごんせ〳〵（ト無理に北八が手を引張先へやり彌次郎がよい〳〵めきたるあるきぶりをかいほうしながら。やう〳〵と境内を出たまど。ふたり共元氣おちて。氣ぬけのしたる如く。ぐにやりとなり）（北八）ホンニ勘平ぢやァねへが。すること。いすかのゝしだ。今思へば。ゆてふべの占者めが強ひことをぬかしやァがつた

百兩の的ゝはづをて當らねど。能く當りたる先のうらなひ

彌次エ、哥どころかコリヤもふつまらねへ者ゑなつな（左平）サイノお氣の毒なこつちやわいの（北八）コリヤ全体左平さんれ前へが惡いゑつちらァ。他國者で此土地の勝手ゝしらず。アノ札の十二支の理屈も。云てきかしてくんなさると。何もこんなゑ番くるわせい。なかつた物を。いめへましい。いつろのくされゑ。是ゝら何所ぞ遊びゑ連てあよびなせへ（左平）ホンニわしもねから氣が附なんだわいのマア何じやあろと一ト歸り戻りなされ其着物の事もあるさかい（ト一の富の。をくさん違ひ。左平治も已れを請合し損料のことも氣ゑ掛り。又彌次郎がうか〳〵と氣抜のしたる体ゑ。をしや橋の上からどんぶりとやりへせまいかと。心の内ゑ油斷せず。樣々ゑいひくるめてまづやう〳〵と長町の河内屋につれ歸

りけをば。番頭ゝかの富の事も承知なれば定めし百両せしめて歸りつらんと出向ひて（コレハお早う御坐り升。ソレ女子どもお茶上んかい。マア奥へ〳〵時ゑお客樣方ゝ何じやらお目度出ことがあると夜前ちらと聞ましたがどうで御坐りましたな彌次イヤ一向役休〳〵。然し命ゑゝ別條なく歸りやした（トひよろ〳〵してふたりとも奥へ行く。左平治番頭ゑさこやき）（イヤモ忌らひ番くてわつたわいな番頭大方十二支違ひドやあろぞいハゝゝ佐平サイノウろじやさかいアノひとりの年のいたお方が。どうドややら氣のふれた樣に見へるさかい氣を附けさんしたがよいわいのモシ雪隱へ行てなら。油斷さんすな首なとくゝりおろもしれんわいの番頭ソリヤきみたの惡いどうぞ早ふほり出してこましたねそのじや（ト引別れて佐平治奥坐敷へ來たり）モシ早速なから損料屋が勝手へ來てゝ御坐り升。もふおぬぎなされてお戻しなさるがようゐ坐りましよ北八アイ返してぐんなせへサア彌次さんお前も脱な（ト二人りながらぬゐて元の古布子を着る。佐平治是を袖たゝみとなして）（ハイ損料錢の書付で坐り升（と差出を北八取上て）何だゞて壹貫八百文こゐつ高い〳〵。ちとまけてもらつてくんなせへ（トやつゝかへしつゝふうち勝手より女來りて

○彌次現金無レ有掛直一

○此レ是チ曰フ泣キ面ニ蜂ト

只今新町の九軒から御勘定頂戴よ参じたわいな（書附を差出し彌次郎とりあけて）なんだ拾五匁坐敷代。三匁硯ぶた。壹匁五分吸物。拾匁三分御肴色々。貳匁五分御菓子。六匁八分六厘が酒。壹匁貳分四厘が蠟燭〳〵て四拾壹匁四分ヒャァ目が出る〳〵北八コウ佐平治さん他國者だと思つてあんまり人を馬鹿にした。夕ふへ喰た物か何こんなよ掛るものかそうてゐ上方者はわだじけぬへ氣のきれたべら棒どもだ佐平ィヤお前方があだトやわいな。何トやあろと喰たもの。拂ふて下んせよやわしがすまんわいな北八イヤおゐらをあたじけぬへとゝ何のことだ馬鹿な顔な佐平治錢だしてから何となといんせあたけさいな彌次コウ佐平さんお前いくらりきんでも。此新町の書出しは違つてある佐平治違ふたとは何が違ふたぞいな彌次ハテわつちらが借て來たゝ子の四拾壹匁四分。コノ書出しゝ亥の四拾壹匁四分とある佐平治ェヽ置くされてんごういはづと金出せやい北八イヤ此野郎めゝ。ふてゐ奴だ（トたち掛れバ佐平治も。ひとすじでいいかぬ奴。たがひよまけず。すでよつかみ合ひよも。ならんかと思ふ所へ此河内屋の亭主四郎兵衛。出來り。佐平治をしかりちらす。北八をなだめて。いさゐのことをきくよ此亭主の樣子頼母しげに見へ。殊に北家の亭主と見てとり。二人も奥底なく。いさゐを語り。身上のすかんひんなる事も。うちあけて頼みければ亭主四郎兵衛。わけよき男よてぐつと呑み（こよう御座り舛。ハテ萬両分限でも。旅でゝ金よ詰ることも。有もんじやげよ御座り舛。此商賣致せば。たとへどなゐな。お方でもお客ゝお客。飯料がなゐてゝ。ろんなら出ていなしやれとは申ませぬさかい。何日なと逗留してお歸りなされ彌次夫ゝ有難ふ御座りやす。わつちらもゆるりと所々見物が仕とふ御座りやすが。もふそんなよ長逗留しても。つまりやせんのら。翌日ゝ出立致しやせう亭主ハテせつかくお出たもんじや。ゆるりと御見物なされ。ホンニ住吉へゝまだじやあろ。さいはひ今日わしも住吉へゆくさかい。お出でんかいな。然しわしい袴屋紺田の方へ用事があるさかい。舟でいこが。お前へ方ゝ生玉天王寺掛けて歩行でお出なされ。新家の三文字屋といふ茶屋よお待ち申まゐよさかい。ノウ左平治殿こなさんな中直りよお供さんせ。もふ四ツ過ぎたじやあろ。じつぎよお出でるがよう御坐り升（トいふにふたりもさいはひのとなりと。其相談よきはまり。左平治ともたがひにあひさつしてこゝろとけ。やがて支度調へ亭主ゝ舟よて行くとのとなれば。こなたと。生玉天王寺に廻りて行かんと。又左平治の案内よて爰を立出。

高津新地より掛り行程より早生玉の社に参り

御普請も新たより見へて、金物の。光りますなり生玉のみや

當社い生魂命。化現の靈玉を鎮奉るといふ。常より参詣の人おほく。境内より田樂茶屋たちつゝき。見せ物。齒みがき賣。女祭文。東清七が浮世物まね。其外樣々あるが中より。粟餅の曲舂い此所を元祖とす。（向ふ鉢巻より手ぎれしやより搆へたる男）サア〜〜評判で〜〜。元祖名代粟餅の曲舂い生玉屋が家の看板ヤレ舂ゲヤレ舂ぞアリヤヽコリヤヽ舂く〜〜〜〜。何を舂。粟舂。麥舂。米を舂。旦那はん方より供が附く。若ね後家御にや虫が附。隱居さんい堤灯で餅を舂。お媚いお客の襟より附。藝子にや又ぢても足が附。コリヤ居去りの金玉へ砂が附ヨイ〜〜サッサ〜〜評判〜〜彌次おねらは年中嚏を附くが。聞いてわされらア

商賣の味みを見せて錢金を。濡手でつかむ粟餅の茶屋、

斯て境内を打過。馬場先通より出たるより。爰い少しの遊じよわりて。お媚藝子の生め

き行こふさま花やかなり。（爰より股引はきて鳥渡片つま。はしよつたる男茶屋めきたる門〜に立ていふを聞けば）イヤア。新吉より舟場邊のお醫者の娘で。ぼつとりとした中年増。お寐間の所いぐづ〜と煎ぢやう常の如しといもふせども。そこには蓋と匕加減。お用ひなされて御らうドませ。天王寺屋より是いまた去所の飴屋の娘で。よつちやり。ぐつちやり澤山な。水あめもどきの。上代物が出ます。何れもお賴み申升（ト觸て行く）北八あまかいなこゝの置きやより新造が出るとゝあなるより云て。呼屋を觸て歩行きおるの云やわいな彌次コリヤ珍らしひハヽヽ左平治時より我しい烏渡。此裏より用事が有るさかい。お前方い此通りまつすぐに先へお出なされ。ツイ此先が天王寺ぢや。いつきに我し追ひつくさかい彌次よし〜〜お先へ參りやせう（ト爰より左平治より別れ。ふたりいりて。少しまがる所。いづれへ行たるがよきやし咄しづれてたどり行より。つきあたれさるゆゑ。先へ行くこゝとりの親父を呼かけてりやすねこゝとりわしゞ跡へ附てごんせ北八ェヽつゐてこいとハわやまる嗅い〜〜〜（ト跡へさがろふとすると）こゝとりふりかへりて（コレイノ。わしや天王寺のツイねぎじやさかい連ま

ふていこわいの。サア〳〵ごんせ〳〵れ前方ハ何所じやいな　彌次　わつちらァ江戸で御座りやすこへとりハアお江戸ハ好い處じやげなアノお江戸ハこゑが一荷何ぼ程するぞいな　彌次　ヒつちらァそんなをいまりやせん　北八　コウ彌次さんちと跡へさがつて行ふ（ト彌次郎が袖を引てこゑ取の親父を。先へやらんとわざ）（彌次　いめへましい親父めだ。おぬらよ糞の直段を聞いたとて。何わかるものだ。氣の氣かねへ）（ト云つゝもはやよほどへだたりしならんと。さつ〳〵と行く）（北八　ニ、情ねへ。あそこにまた待て居や向ふよ。又今の糞取親父待受て居るてねに）アがるこゑとりサア〳〵ごんせ〳〵お前へ方またこゝじ道がしれぬくかろサア〳〵。ごんせ〳〵。今見ればお前方あこで小便ゑてじやあつたが。お江戸じや。あなおよ皆こきばなしよしてじやろうな。もつたいないことハいの。マアお前方ハ一日よ幾度程づゝ小便をしてじやぞいな　彌次　ソリヤアニ三度する日もあり四度五度する時も有り定まつたこたァ。御座りやせん　糞取　ふとう出るか細う出るかいの　彌次　エゝお前も色々なことを聞くもんだ。わつちなぞハそんなでもねへが此の男のハ何のことハねへシヤア〳〵と瀧の落るやうに出やす　糞取　アゝ。そりや能ふ。さくじやあろよ。おゑひてとしてじや　彌次　ちと急いて行ふじやァ。ねへか　北八　チヤ手前へ何をする（トとがめらの袖を引き小聲に）（北八　アレ見ねへ糞擔の内よ銀のかんざしのあたまが見へる）（ト彌次郎は。彼の親父と。咄しなからゆくうしろの方にて北八は。あたりよあり合ふ汚きれを拾ひはゝとなをて。〻の糞擔のかんざゑをはさみとらんとゑたる時。糞取親父。やつこらさト肩を替んとする拍子。北八ハ持たるはゑをハねとハさ）（ニ、是ハとんだことをゑた）（鼻紙をとてそこらへんにとはゑり掛れハ彌次も北八も）ゑてふく。此内親父ハ前の方よな）（コリヤ何じやいな）（ト北八をつまみてちよいと引上ア見れば余程目方の見ゆりたる擔のりよかんざしを見つけ）るかんざしなれば）（糞取　コリヤゑひのじや。大方雪隱ハ中へ落て有たのじやあろぞい。孫娘よゑい產物じや。ドレお先へいこわい。ゆるりと跡からごんせ〳〵）（トいさねかまハ）（北八　エゝごうはらなことをしよ　彌次　アゝ手前へろくなことハゑねへ。なんだか。からだ中が臭くて。やつぱり今の親父めと連立て行やうだ）（ト小言云ながらゆくともなゑに早くも天王寺の西門よ至りければ爰にて左平）（左平　ヤレ〳〵しんどやの。やう〳〵のとで追附たコレ見なされ此鳥居治跡より來り）の額ハ小野の道風の書たのじやといな　彌次　なるほど咄しに聞て居やしたがコリヤア

○天祐之湖彌次等應仰天

何だか。ねつからわからぬへ

からめきて見ゆる文字よ知れけり。小野の道風のお筆なりとも

抑々此四天王寺ハ上宮太子の御草創よて由來ハ太子傳記よくをくし見ゆまことに日の本最上の靈場よして。堂塔ハ莊嚴いふもさらなり

何となく心いうちやう天王寺。ヨれを忘るゝありがたさよを

御境内の廣大なる記し肅すべからす。大方ヨ順拜し（こゝよも色々あれ共略そ）夫より安部街道にいでゆく道すがら。畑うち男の唄ふをきけば坊様よヲ大坊よヲ。ちよつちよと。めさるまねゐいの。コノ大坊んよヲ彌次とつさん。せぬが出やすの。もふ何時だへ男アイきのふの今時分じやあろぞいな彌次詔やアがれお定まりの酒落を云ふハ時ヨ北八莨の火でも一ッ打ッせへな北八向ふの乞食が呑で居るから吸附けなせへ然も女の乞食だ彌次ナニきたねへ北八とんだをいふ。こつちのきせるで吸附けるものをドレ〳〵おねらが借りてやろふコレ火を一ッかさつし（廿一二歳の女の非人）ハイいんまッイ渋し

ましたさかい。ちよと打て上ましよかいな北八イヤうつ位ならこつちヨも有女そしたらお前さん一ッ打ておかしなされ北八いゝことをいふ然ち貴樣の。こつたものを。打てかまやせうノヴ彌次さん。見なせへ乞食にして置はおしひ器量だ彌次ホンニ仇代物だ。コレ手前男が有るか女ハイ亭主ヨハ去年分れましたわいな彌次ろんなら又新らしく片附ハいゝに女さよじやわいな此間ひだも世話やねてじや。お方が有てな。先の男もいゝ男じや。年中裸でこゝ居れ。てん〳〵てんまのお手子が。ねからゑらひ上手じやて、。一生貰ふて喰せのねん男じやさゐい。あこへ行んかて、。云ふてじや有たか。肝心の家かなねて、。よふ參じませんわいな彌次已がいゝ所へ世話をして遣ろふ此男いどうだ女チホゝあのお方の所へならわしやどうぞ行たねわいな北八已も家がねへが能ゝ。然ま今普請最中だ出來あがつたなら呼びやせう女ソリヤ何所に普請してじやへ北八イヤ所い何と云所かゑらねへが。こゝへくる道に橋普請して居た所が有つたがあれが出來たら。其橋の下で祝言しよふ女そうゑたらわたゑも新

○情態
穿得無
間然

らしひ莚なと貰ふて着りもんの支度せうわいな　北八　ドレ結納よ壹文遣ろふかハヽヽ
己が乞食だと手前を女房にするものを。殘念〳〵　女　ハアお前いさんハアノわたしら
が仲間の衆じやなぬかへ　北八　しれたとよおぬらいしらきちやうめんのお町人樣だ　女
我しや又そなぬよ垢じみた。しゆんだなりしてじやさかい。仲間の衆かと思ふたわ
いな　北八　ヱヽいめへましひをいふ　左平治　ハヽヽヽお見立ゑらひもん衣やサア〳〵
お出んかいな〳〵　ト夫より住吉街道よ出たるよ。貴賤老若うちまじりて。此御神に
あやみをはこぶ道すからの賑ひ。引もきらず。こゝよ大盡ふう
の男まつしや。あまたつれたるが。ざはぎ立て丹波屋の門に立とまり。各々彼の〳〵コレ
閼子一トくしづゝもとめてよこぐはへの酒落とてかける此大じん名ゝ河太郎〳〵
婆樣わしや。閼子より外に。買ふていよたいものが有るがやんせんかばゝハイ〳〵
何なと買ふておくれなされ　河太郎　ろしたら此門にたてゝある障子一枚賣て下んせ。
是やろわいの〳〵ト まいさげの胴亂より金一分出して遣ると。婆々ゝ肝をつぶしあきれ
おどろき〳〵た顔して居る内。河太郎みづから其障子をはづしよかゝれゝ未社ども
コレハ旦那こなぬな破れ障子百疋とは。ろら高の數珠じやわいな。然し是よゝ
何ぞ氣疎御趣向が御座りましよいな　河太郎　私や日向あるくと逆せて惡いさかいコレ

久助。コノ障子持つてこんかいコリ
ヤろちよも壹分やるゝ其の替り住吉
迄コ建てよして持て歩行けヨヽそ
ふじや〳〵ト障子一枚を。たてよ持
たせて。其影を行といふ酒落なり河太郎といふは浪花名代の
くゝつぶつよてかゝる酒落をなした
のしみとし其名。殘りたり。彌〳〵彌次
次郎北八是を見て氣よつとし
イヤこゐつゝ中〳〵面白い　北八　上方
も馬鹿にやアされねへ。とんだ酒落
物がある奇妙〳〵ト だん〳〵此八
々の跡よ附て行
ば凡六七丁も行たると思ふ
頃彼の先へ行く大盡河太郎〳〵イヤ障
子も少しうつとまうなつたわいな　久
助ちと明けましよかいなお庭ゝいて

廣い。泉水い御前崎。淡路島が築山とはゐらひもので御座り升わいな　河太郎　久助もふ
其障子ほつてしまへ　久助　もふよう御座り升かいな　河太郎　おけ〳〵（トいふよかれ障子道ノ傍へほふり出してゆく）ナント彌次さん。此障子を拾ひはどうだ　彌次　イヤ〳〵京で梯子まこり跡より北八て居る　北八　ハテふたりで替り〳〵持ておねらも障子の影を行ふじやァねへか。面白い洒落だせ　彌次　なる程。今日いごうてさよ。あつたかで日向ぬ。のぼせる。北八持てきさつし　北八　替り〳〵持のだが能か　彌次　承知〳〵コリヤ奇妙だ（ト北八よせうじを持たせて彌次郎其影をゆくよやがて天下茶屋村なる和中さん是齊の見せ先よいたりけるよ）麗かな天下茶屋から四方に名の。羽をのす鳶の和中散みせ

（此内向の方より下向の太勢連）てうさや〳〵万ざい樂じやや〳〵ハヽヽアリヤ何じやい日傘の替りじやな。アノ持て行おる奴の頬見いやい。檀尻の印しもちと障子持いく奴よ賢い頬はなねものじやわいハヽヽ北八　コノ猿松めらハ。なにぬかしやァがる（先の相手）何じやい。おどれ病ひづかしくさるな壁あげさせてこませやい　北八　コリヤ江戸つ子だハ。片

つぱしから張とばすぞ（ト持たる障子を振まはせば先の大勢の中よ今宮新家の權七といふ赤ら顔のでつくりゐたる親父北八をとらへて）コリヤ此障子いどまておどれ。こゝへ持てうせたぞね。巳か内の障子じやわね　北八　馬鹿アぬかせ。ナニ己れが所のもんか　親父　イヤ。こなねよ大きよ書て有るのがおどれが眼よや。はいらんのいのコレ見い善哉餅三五團子。今宮新家さいかち屋と然もわしが書たのじや。今日此衆と。住吉詣の月參よ行た留守よ。婆々ひとり置て出たが。コリヤおどれら盗みくさつて持てうせたのじやな　北八　ナニ盗賊したとい。うぬふてへ奴だ。コリヤア道で拾つたのだ　親父　あほふなをぬかせやね。障子拾て行くもんがあろかい。あんだらつくしあがれ　左平　コレ〳〵おつさんコリヤこうじやわいな。誰やらお前への所ろで此障子買ふて持て來てじやが。道へ捨たさかい。此お方が拾ふて來てじやあつたわいな　親父　エヽこなんも。あほうつくさんせ。こなねに書て有るハコリヤわしが所ろの看板じや。賣物ぢやなねわいの　北八　夫でも壹分出して買つたを。おねらア見て居たい糞たれめが　親父　おきくされ。こなねな古障子誰が百にも買ふ。ものかい大方おど

○障子牛萬

れら團子喰らひおるて丶。はづしくさつたの。じやあろぞい。何んドやあろと。此障子己れが内まで持てこゐサア跡へ戻りや〳〵 左平 コレ了簡さんせハテお前への障子ならこゝから持ていんで下んせいの 〔ト障子をつきつくればつき戻し。かれ是とせり〕違ふところへ馬方一人馬を引てこゝへきかゝり〕何んじやい〳〵。往來あけて下んせ 〔ト引て通る鼻の先。障子をあつちこつちへ引張合。ほふり出せば此馬よ當り〕馬ヒイン〳〵〳〵 〔ト驚きてはねわがる拍子に馬方。はね附られ一二間向へ。のた打まはりて〕あいた〳〵〳〵 左平 コリヤ。どしたぞいな 馬方 イヤどしたところか。あいた〳〵コレ金玉がなふなつた。そこらよや落てなゐゝ見て下んせ 親父 ナニ金玉がこゝらよや見へんわいな 馬方 それでも。とこかへ。左平 袂よやなゐか見やんせ 馬方 ドレ〳〵ないな 皆じや 廣袖ドや 左平 コリヤこなさん持て來あしよまい。内へ置て來やせんかや 馬方 わほう云んせ。然もわしや 疝氣持で大金じやさかい。こなゐに袋に入れて首よかけてゐるわいの 親父 そしたら。其袋振ふて見やんせ 馬方 ドレ〳〵。イヤあるわいの。今のびつくりで。上の方へ釣しのあがつたのじやろうな。揉み出してこまそ。イヤ出てきおつゝ〳〵 北八 ハ丶なるほど大金だ 彌次 施

餓鬼の袋と同じことで。ふしやう〳〵に一ぱひあるハ丶丶 馬方 イヤ金玉いろいが膝の皿。摺むゐた。コリヤお前方い何で此障子を。わしが馬へ打ちつけさんした 左平 わーやしらんわいの 馬方 しらんて丶コリヤ誰か障子じややい 親父 わゝが所ろのじや 馬方 見やんせ。こなゐに疵が附てい。すまんわいな。障子に今宮新家さいかち屋と書て有さかい是が證據じや。サアごんせ〳〵。何じやあろと。こゝへいて。めきしやきと勝負せにや。おかんわいの 〔ト障子を引たくり馬に附ほそびきよてからみゐさひかまいずしやん〳〵と引て行〕親父 コリヤ〳〵其障子どこへ持て行おるぞい。

まてやい〳〵 〔ト追ふてゆく皆々跡より〕てうさや。ようさ。萬歳樂じや〳〵 〔ト かけて行〕彌次 ハ丶丶 馬方めが。おつをやつたハ丶丶

美濃紙の破れかぶれと喧嘩せし。跡の仕末の障子千萬

斯くて夫より三人ゝ程なく住吉勝家ゑ至りけるに。實ゑも此御神の繁昌ましますを
は両側の茶屋ゑあらゝれ。何れも家作美麗にして赤まへたれの女門ゑたちならびお
休な〳〵お仕度なさらんかいな。蛤のお吸物もお座り升。鯛も。ひらめも御坐り升。
おハいりな〳〵北八ア、どれもい、茶屋が見へる。御てへろふな

びち〳〵と客のゝねこむ賑ゝひは。料理肴も新家町なれ

此所の名物ゝ。金魚酢蛤。ごろ〳〵煎餅。唐からし。昆布。竹馬。糸細工抔ど商ふ家
あまたある中に。料理茶屋ゝ三文字屋伊丹屋昆布屋丸屋などいへるが。わきて客の
たへまなく繁昌殊にいふゝかりなし左平モシ〳〵あ、が三文字屋よトお待なされ（ト玄
関よりのぞき見れば奥ゑ長町の河内屋早爰ゑ來り合せ）コリヤ佐平治殿早ようどんしたの彌次わつちらア。やう
〳〵たつたいま。まいりやした。先參詣致して參りやせう（、是より打連て御社にいたる）抑々此大
神ゝ千早振。神代の御時。日向の國。小戸の橘の。檍原より。あらはれ給ひて。當社の

御饌坐ゝ神功皇后記十一年辛卯四月廿三日とかや。四社ゝ底筒男命。表筒男命。表
筒男命。神功皇后是なり。攝社末社すべて三十余前。巍々として。つらなれり。先御本
社ゑねかづき奉まつりて

海上を守り給へる神垣や。いとおだやかゑ見もる並松

和らかに歌と出かけて樂天の。顔をよおせし住吉の神

かくて御社内を巡るゑ際限なければ。あらましにして出見の濱の高燈籠もゆびさし
見たる迄ゑて急ぎ。かの三文字屋ゑ戻りたるに。女共ばら〳〵と立出お早ふ御坐り升
た。サアあがちやへお出なされ佐平アノ河四郎さんゝ何所じやいな（ト云つゝ打連て奥へ通ると）
河内やゑらひお早いこつちやの北八ごうてきゑ腹がへつた河内やヤア一ッ上りなさ
れ（ト盃をさす）北八彌次さんれ先へ彌次て手前呑て差やれ北八もふ口をかけるの左平お肴
ゑ何がよかろ北八何ぞ腹ゑたまり巻ふな物をくんなせへ彌次エゝきたねへとをいふ
男だ北八へい人のこたアいひながら。ソレまだ酒盃も。いかねへ内にお前へ肴をして

○貫即チ
鈍彌次
始吹ノ弱イ
管ノ

やるじやアねへか　佐平　コリヤ忍らひ。ちゆみに。なつてじやわい　彌次　イヤもう河内屋の親方のおかげなりやころ。こんな味へ物も喰ようなもの、。なるほど錢のねへ旅はうねものつらね者だ　トさすがの彌次郎。たゞめてよいかねをいだし。し　よげかへりていふゆゑ佐平おかしさをかくして　ナントお前方い大坂者にならんせんかい　北八イヤわつちらも何ぞ覺へた職でもあると能けれど是で喰をうと云ことが一ツもねへから何所へ行てもつまらねへ者さ　河内ホンコ忍いことが有わいな。どうじや二人の内一人い賣附る口が有れになア　彌次どの樣な。とで御坐りますね　河内　男妾の口が有か。どうじやいな　彌次　コリヤ。ほんにかへ。面白へ。

トわつかましくも。にいかよ鼻をひこつかせ　モシわつちが樣な者でよくば。おうれしがれい北八もすつと前の方へ。でかけ

世話なすつて下さりませ　彌次　ハ、手めへじやア手がねへ。然し御卟今の親方の前で。こんなことを云いおかしなもんだが。わつちゆら先の氣よ入よやア。違へのねへ事が御坐りやすから。どうぞ夫がほんとうの。ことならい。わつちをナもし。へ、、ハ、、、、河内　コリヤ。せいもん。ほんまの。こつちや。忍かも先の代物い忍らひうつく

しふて。年い三十四五にもなろか。船場邊て工面の忍ひ所ハ後家殿忍やわいの。わしや。ろこの番頭が心ろ安ふて。いんまの先こ、へ見へて其の咄しまてじやつたがどうも役者買ふて金遣ふてならんさかい。厄介のない男妾。抱へたゞねと云ふこつちやさかい。モシいこと思ふてじやなら。わし世話してあきよわいな。マア何忍やあろと。うの後家殿見なさらんかいな　北八ナアニ見ずとも。よう御坐りやす少々い目からでも。鼻つかけでも。ろまよやア頓着は御坐りやせん　河内や忍やて、主番頭が供まて。あつちやの坐敷へ來てじやさかい。ドレわしがマア鳥渡いて聞糺して。こまろかいな　彌次　ハイ宜敷お賴のみやす　トニ盃機嫌よ無生よのりが來て賴のむ　彌次　コウ北八己か行のだせ　北八氣の強ひことをいふ。お前へ　男妾と。いふ顔か。つねぞ鏡を見たことは。ねへろうだ　彌次馬鹿をいふな男が惡るくても手がある手前へふやアましだい　北八ナニましなものか。ノウ左平治さんお前へが女なら。彌次さんよ。ほれるか。わつちにほれるのどうだ左平　わしやどつちやへも氣いなゐわいの。ハ、、然し人い惚ゐでも。お

○有レル手之語暗ニ寫ニ彌次ノ折ロ我ヲ

前へ方ゝめん〳〵が已惚てじやさかい。ゑいじや。ないかね北八そんなら男振は五分〳〵に。したがい、年の若い丈已がい〳〵彌次イヤお年やくよ已た左平こうさんせ。わし圖を出すさかい。長いのを取んまたのが。お妾樣じや北八コリヤよかろふ南無住吉大明神樣。私くしへ長いのを。おさずけ下さりませ左平サア取りなされ。ゑひかいな。ソレすい〳〵のすウ引彌次コリヤ長いのじや。しめた〳〵（トうてう天よなつてよろかへり）（おぶうち河内屋四郎兵衛）

來たり（サア出けたわいな〳〵。番頭よ掛け合て來たが。何じややら味い咄しじや。給金ゝ望み次第て別に又牛房と玉子代がなんぼやら。しきせは後家御〻ら年中和ふかもの何んぼなと拵らへ次第。三臓圓と巨勝子圓ゝ通ひて取て呑せると云こつちや。わいの彌次江戸よも山東京傳の見世よ讀書丸といふ藥が御坐りやそが。コリヤア。酒落でなし。ほんとうよ氣根を強くすること奇妙といふ藥だから。ハテ氣根がつよくなれば。何も彼も強よくなると云ふもんだよ。よつて是をも取りよせて用ひやせう河内屋さよじやわいの時よ。いま壮後家殿がこゝへ見へる。はづじやわいの彌次ナニ今こゝ

へかへ。ソリヤ大變だ〳〵ア、此なりでゝつまらねへセシ左平さんこゝらよ髪結床ゝ御座りやせんかね北八エ、置なせへ。むくろ岩ゝ三年みがひても白〻ゝならねへ。性の者を性で御目に掛けるがいゝ。たとへよも見ぬ商なゝ出來ぬと云がこれぐかりゝ。見たら直よあつちからお斷はりよわひそうなをさせハ、、、左平時に向の座敷からゑい年増が來おるわゝの河内屋あれじや〳〵。大方こゝへ來るのじやあろう彌次コリヤたまらぬ〳〵（トむしやうよゑりかき合せ。俄よまじめ顔して居ると。彼の後家といふは。すつかりとした上代物。はへ下りがふつさりとして色ゝ雪の如く白く。一た皮目よ愛きやうぼたり〳〵とこぼれ落る斗り縞縮緬のむく三ッ斗り重て。黒天鵞絨の帶。前よむすび桃色縮緬よ縫のある長襦袢。裾からちら〳〵と出しかけすこしほろゑい機嫌よ番頭ひき連て來ると河内屋の亭主出向ひて）（コレゝ能うこそサ、あつちやへ。お出おされ後家おゆるしなされやチホ、番頭どなたも御免下さりませ。あつちやへ女子ばかりで。ねゝらはから。御酒の相手がなゝさかひ幸はひと。河四郎樣のお出で此方の後室の大悦こひつゝてゝ私くしもおあひなと致そうと存て參りました河内屋サア〳〵もちつとねきへれよりなされ早速ながら持合せた盃を先あなたへ〳〵（トご後家の所へさせば。

につこりとして取上げ（ト云つゝ少し受て呑み）わたしも。いこ酒が過ぎたさかい最ふろなねにい能うたべませんわいな（此お盃の。御返盃致しましよかいな河内屋イヤわたしもさつきからゐろふ過ましたマアどつちやへなとお差しなされ 後家 さよならあなた近頃はパのり樣なから（ト彌次郎へさす。彌次郎い為じう夢中となり。此後家の顔ばのり尻目よかけてじろり〳〵と見つめて居たりしが。盃を差れてぞつとする程うれしくうろたへ出ま）ハイ〳〵頂戴きやせう 左平 コレ〳〵。ソリヤ盃じや無。烟草入じや 彌次 ホイ是い取違ひて麁相せんばん。サア北八。つゐでくりや 北八 おらアしらぬへ勝手よつゐで呑なせへ 彌次 エ、しよよんな男だ（ト仲居よつがせ呑みほし）番頭 ゐらひお手際じやな最一ッお重ねなされ 彌次 イヤもふわつちいいつも酒を飲とだん〳〵色が白くなつて。後にいとんと白羽二重の樣よなりやすが。今日いなせか。こんゐよ眞赤よなつて。たべられやせん 後家 おあひなと致しましよかいな 彌次 ハイ〳〵。ノッ北八あなたへ。おあひをお頼ヤそふかの 北八 勝手にしなせへ 彌次 ハ、左樣なら憚りじやけれど 後家 何のまア（ト盃を受る）河内やコリヤおふたりして。わつちやゐ。こつちやゐ頓と婚禮の祝盃

の樣じや 後家 ヲヽおかしチホ、彌次 コリヤこてへられぬハ、〳〵（北八 靜よ笑なせへ有の中へお前の唖さが這入らア 彌次 いゐつてもいゝ。だまつて居ろへ。もし兎角此の男めはわつちがずるとにけちを附てなりやせん。わつちも是でも哥も唄ひやすし三味もかぢりやすから、女中方をころ〳〵と面白からせるとがゐて物て御座りやす。ろんな時にい兎角さやつめが燒餅やいてこまりきりやす 後家 ホンニお前さんいどふやら面白そふな。お方じやわいな（ト思外うけのよさよ彌次郎い心の内にもうしめたとよろこびゐる内後家がめしつかひの女が來）モシ只今嵐吉が見へました。さたりて

つきよからあつちやの坐敷で。あなたのお出なさるを。お見受申ましたが。御遠慮致

○北八始ヲ發ニ幾句ヲ所最モ合ニ諧謔ヲ是レ滑稽之本趣

しておりまーたけれども鳥渡なとお伺ひヤて。いのてゝ。あつちやの坐敷に待てゝ御坐り升わいな後家アノ嵐吉が來てかいな。コレハ河四郎さん有難ふ御坐り升。皆さん是よハイ左樣なら〈ト俄のよろゝ〉〈として。あひさつもろこ〉。番頭〈コリヤ連て立て行を彌次郎ゝあつけよとられた顔つきして〉何のあとだモシ嵐吉だア何のことで御坐りやすね河内やコリヤ嵐吉三郎と云て。今での立者。年ゝ若し男振ゝよー。おほさか一番の役者じやわいの彌次ハアろんなら後家殿が俄よわいてゝたつて行たゝ其役者めよ惚て居ると見へるゝへ河四郎さよじやあろぞいな左平コリヤア彌次さん。いかひお力ら落しじやわいな北八ハゝゝ面白へ〈。コウ彌次さん。こゝへきがけよ見たら此ちと先よ髪結ひ床が有た。ふめへ今行て髭月代でもして來ねへな彌次何とでもいやアがれ〈トつらふくらして小言いつてゐる内番頭又出來りて〉河四郎さん聞なされ。これじやさかい。我しや心遣ひトやわいの。アノ嵐吉がゐらひ。ひねきトやさかい。さいゝひのこつちや。是から嵐吉と一所に船でもふ。いぬさかい。我か身ゝひとり歩行ていねてで我し斗りまかれまゐたわいなもふ御相談のこともわ

かん咄しじや。お先へ參いりましよ。何なたも是に御坐りませ〈トあひさつそこ〉がて奥坐敷から庭よおりてかの後家も嵐吉をともなひ。腰元下女打連れてなよやら面白そふよ笑ひさゝめきて出かけるていを。こなたより見て〉左平アレ〈嵐吉ゝなるほど。ゑい男じや彌次アノ墨仕立の野郎か。ナニあれがいゝ男。くそがあきされる色の生じらけた日影の瓢箪見るやうな。しやつ顔だ仲居お前いさん。ろないよ云ふてじやけれど。わないなゑい男ゝ。やつとゝ。御座りませんわいな。ろゑやさかい嵐吉よ惚ん女子ゝおさか中よゝ。なねといな北八アレ〈彌次さん見なせへ。何よか後家めが。さゝやねて。こつちの方へ指を差して笑つて居るゝ大方れ前へのことだろふ彌次いめへましい河内屋の親方お前へが恨みだ〈〈〈〈トむしやうよ。愚痴を云てくやしがる。彼の後家ゝいさねかまわずさるき連て出て行く彌次郎うらめしげよ〉モシ〈〈我つちら。もふ歸りやせう河内屋ゑいことが有わいな。わーが舟。待して。わるさかい皆一所よ乘つて敵等が舟のじやまして。やろかいな彌次コリヤいゝ〉思ひ附だ。サアろんなら出掛けやせう左平然し。お待ちなされ。どうじややら雨が落ちて來たじやなねかねな彌次雨でも鎗でも頓着ゝねへ。サ

アお立なせへ（トひとり氣をもみ先へ出かける所よ時なら）ぬ。かみなり。彌次郎のあたまの上よて（ごろ〳〵〳〵〳〵皆々コヲヤ厄体じや　彌次桑原〳〵（トあわてかけ戻る此内雨い次第よ。おほぶりとなり。いるやら窓をしめるやら。三文字屋の家内の者も立さ（北八コリヤ。とんだめよあつた。いげば皆〳〵一ッ所よ。よりかたまり桑原〳〵なびかりすさまじく。雷はしきりよなりつふけ。雨戸をく此雷て。うらやましひい嵐吉だ今頃い船の中で。ごろ〳〵。ひかりといふ度に。アノ後家めがチヽ強いなぞと。しがみつきおるだろふの河内やソリヤろうじやわいの。アノ後家い嵐吉よ。ゑらひいまりドやと。云てつちやさかい此雷を。さいいひよ喰附へり。ひつこぬたり。いなれいしよまい北八左様〳〵アノ。又後家が額つきや。はへさがりのあんがいでは。てたゑられめへのふ彌次さん彌次れがむから。もふいつてくれるな左平ソレ又光つた雷ごろ〳〵〳〵北八ヲヽおりやの（ト後家の物まねして彌次郎アよだきつくと。つきとばし）アイタヽヽ。エヽ何をしやアがる。あいた〳〵〳〵北八コレ何所がいてへ彌次此風呂敷よ包だ天狗れ面が痛くてたへられねへ北八ハヽヽコリヤ其皆〳〵左平時よ雨ハやんだ。ろうじや此間よちやうと舟へ出掛ましよかい彌次サア〳〵早く參りませう（ト

とりせさ込。先へ立て玄關の方へ出掛ると。大ろうなるいなびかり（ぴかり〳〵〳〵雷ごろ〳〵〳〵ぴしやり〳〵〳〵〳〵（トあたまの上へおちゝる如き大雷に彌次郎わつと云てそこへゝたばり顔をしかめて（あいた〳〵〳〵左平何んとしたぞいな彌次エヽ何んと去た所かへ去をれた〳〵北八何をへちをつた彌次今のぴーやー〳〵でハつとへたばつさ。はづみよ彼の天狗の面の鼻杜が。ほつ切と。いつたやうだ痛〳〵（ト金玉をかゝへ來て痛がるゆゑ。皆〳〵おかしさ。どつと打笑ひてけうよ入げる内程なく雨も雷もやみ。ろらも。あをゝ〳〵となりたるよ河内屋四郎兵衛うれしや天氣よなつたそうな。ナントもう一盃宛わつさりと飲直して歸わいの（トうらたよ肴を取よせ大笑ひとなり。各〳〵酒よさ程に（斯て彌次郎兵衛。喜多八は。河内屋の方汲かはし。夫より打連て長町へと歸りける（又〳〵逗留して所々殘る方なく見物しける内よゑ。て斯る難澁の身を。へちまとも思はず酒落通して少しもめげぬ樣子に。河内屋の亭主大きよ感心し衣類なぞ新らしく着替へさせ路用十分に持たせ大坂を出立。させけるゆゑ。此度い木曾路よ掛り。草津の温泉よ一回り遊び。善光寺へ廻り。妙義秦名へ參詣し目出度歸國去たりける。此記行い追て。あらはすべく。まづい爰よて。筆を差しおき

おはんぬ

增補道中膝栗毛全部大尾

明治十八年一月廿七日飜刻出版御屆
仝　二月　日　出版

飜刻出版人　神奈川縣平民　市川路周

發兌書肆　日本橋區横山町二丁目十四番地　文事堂

同上

各地賣捌書肆

東京 小笠原書房
仝 辻岡文助
仝 內田彌兵衛
仝 鶴聲社
仝 山中市兵衛
仝 博聞本社
仝 北畠茂兵衛
仝 稻田佐兵衛
仝 須原鐵二
仝 丸善書店
仝 叢書閣
仝 山口藤兵衛
仝 春陽堂
仝 小林新造
仝 青木國次郎
仝 巖々堂
仝 金港堂
仝 今古堂
仝 錦光堂
仝 松山堂
仝 內田芳兵衛
仝 加藤正七
仝 倉田太一郎
仝 中西榮次郎

仝 山岸佐吉
仝 江嶋喜兵衛
仝 江島伊兵衛
仝 松井忠兵衛
仝 藤谷虎三
仝 金櫻堂
大坂 柳原喜兵衛
仝 前川善兵衛
仝 松村九兵衛
仝 前川源七郎
仝 辻村信太郎
仝 赤澤忠七
京都 田中治兵衛
仝 大黒屋書舗
尾張名古屋 片野東四郎
仝 石版社
美濃岐阜 三浦源助
仝 玉井忠助
仝 岡安慶助
越後長岡 覺張治平
仝 目黒十郎
仝 松田周平
仝 大橋新太郎
仝新潟 林留吉

仝水原 西村六平
仝中魚沼 富澤清助
仝三條 樋口小左衛門
仝巻町 笛木又平
仝高田 室直三郎
仝 小方長吉
仝 清水庄平
仝地藏堂 伊丹屋藤吉
函館 魁文舍
仝 田中太郎
仝 常野嘉兵衛
青森大町 松森嘉助
弘前 野崎九兵衛
陸中盛岡 佐藤庄兵衛
仝中ノ橋 澤田正助
仝花巻 梅澤喜八
陸前仙臺 伊勢安右衛門
仝石之巻 淺野利兵衛
仝涌谷 久道惣五郎
岩代福島 齋藤彥太郎
仝二本松 安齋彥輔
仝若松 田中善平
仝郡山 富屋久之亟
磐城白川 奥村市右衛門

仝棚倉 松屋常吉
信濃長野 西澤喜太郎
仝 協和堂
仝松本 高美甚左衛門
仝小諸 小山九郎兵衛
仝上田 鼠屋甲造
甲斐山梨 內藤傳右衛門
仝 徹古堂
常陸水戸 川又銀造
仝土浦 光風堂琢本書房
仝 柳旦堂
下野栃木 叶屋儀右衛門
仝宇都宮 田中庄太郎
上野高崎 文心堂
下總千葉 乙亥舍
仝行徳 松丸騰四郎
仝佐原 好文堂
仝境川岸 高木直二郎
仝松戸 根本勝之輔
仝八日市場 木內嘉兵衛
仝銚子 石井藤七
武藏熊谷 松枝悦三郎
仝行田 共和堂
駿河靜岡 浪花屋市造

全　遠江濱松　佐藤健俊次郎
全　三河豐橋　白木須賀廣治郎
全　岡崎　高屋文政吉
羽前山形　本馬右工門
全　相馬　五十嵐太治郎
全　荒井大平衛
全　平田彌次郎
全　小藤平門
全　米澤索月晨之助
羽後久保田　本間金左工門
全大曲　板谷五善助
全酒田　白崎八右工門
全横手　渡邊八右工門
加賀金澤　近藤八郎右工門
全　中村喜平
全大聖寺　能登安兵衛
越前福井　酒井宗次郎
近江大津　澤宗兵
播磨姫路　竹内久三
紀伊和歌山　鈴木眞文
和泉堺　平井東
摂津兵庫　山野長

肥後熊本　長崎次郎
薩摩鹿兒嶋　吉田幸兵衛

全　阿波德島　四日市
全　波岐高松　伊藤善太郎
全　澄松岡　但馬豐松山　黒田二郎
伊予豫松山　因幡鳥取　黒坂助吉
出雲松江　岡田助平
美作津山　土橋助平
備前岡山　由利助門
備後尾道　横田助
安芸廣島　寶川舍
全　園部榮
備前萩　横山助
備後福山　富田平
長門　弘村助
筑後久留米　三木晉
筑前　森平
豐前中津　松友兵
豐後大分　松山南
肥前長崎　赤野正治
　　山野一
　　鶴川清
　　依田右工治
　　司原
　　崎喜
　　藤善兵
　　三二
　　常
　　正
　　野
　　平
　　安
　　與
　　爲
　　萬
　　源
　　精
　　郎二
　　助吉
　　助平
　　郎
　　門
　　助
　　郎平
　　榮
　　舍
　　衛助
　　助
　　助
　　衛登
　　輔三
　　郎藏

國立中央圖書館

089560-000-5

特12-482

道中膝栗毛（増補訂正）

十返舎 一九／著

M18

DBM-1484